

文樂座人形淨瑠璃



文樂座 四ツ橋

一部 金十五銭

陽春を飾る

### 文樂一座總出演興行

柳さくらの眼覺むる艶やかさ、はるを賞づるあなただ様の御顔せの美しさ、まづお欣び申上げます、尙文樂人形淨瑠璃も爰に堂々響を並べて四月興行の陣に就きました。狂言も撰擇を重れ恰も弘法大師千百年遠忌に相當りますので大阪朝日新聞社主催弘法文化宣揚事業に協賛して古曲「弘法大師いは物語」を抜萃収録して鶴澤友次郎が新らしく筋付古軼大夫さの佳き名演出、珠玉の名品「壽し屋」は紋下津大夫の名人藝、土佐大夫得意の至藝の大文字屋、尙三世南部大夫の十三回忌追善の「揚屋」新趣向に熱演する「戻り橋」等々絢爛を極むる豪華版で御座ゐます、何卒絶大の御聲援をお願い申上げます。

昭和九年四月

## 文樂座

昭和九年四月一日初日

初日 午後二時開幕  
毎日 午後三時開幕

#### ・御 觀 覽 料 ・

- 一等椅子席 御一名 金三圓
- 二等 席 御一名 金一圓五十錢
- 三等 席 御一名 金八十錢
- 一等お座席 御一名 金三圓五十錢

一等お座席は五日前より  
一等椅子席は五日前より

#### 前賣切符發賣致居候

前賣切符(南四七一)番  
專用電話(75)三〇三二番  
電話(南)三七八八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越を願ひます。

本誌へカツト廣告御載希望の向は文樂座編輯部へ希す

## 永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目  
長三九四番  
四九九番  
三九九番  
一〇四番

(44) 堀土佐







四月興行  
 文樂座人形淨瑠璃

豫定時間表

碁太こ平たい記き白しろ石いし噺ばなし

吉原揚屋の段 (三時より四時まで)

幕間 十分間

鶴澤友次郎作曲

弘法こうぼう大師だいしいろはいろは物語ものがたり

貧女一燈の段 (四時十分より五時三十五分まで)

高野山奥の院 (五時四十分より五時四十五分まで)

萬燈會の場

幕間 十五分間

義よむ經つとむ千せん本ほん櫻ざくら

壽し屋の段 (六時より七時三十分まで)

幕間 十分間

道行初音の旅路 (七時四十分より八時十分まで)

幕間 十分間

紙かみ子こ仕し立たて兩りょう面めん鑑かん

大文字屋の段 (八時二十分より九時四十分まで)

幕間 十分間

増ぞう補ほ大おほ江え山やま

戻り橋の段 (九時五十分より十時三十分まで)

# 文 樂 土 産 (二)

## 木 谷 蓬 吟

### 鮎屋と權太

千本櫻の淨瑠璃は、竹田出雲等の傑作で、百九十年も流行性を失はぬ名曲である。全編を通じて、やはり一等出来のよいのは鮎屋の段であらう。この鮎屋の場の舞臺上の好評が影響して、大和下市の本元の鮎屋が一層繁昌を見せ、彌助鮎といつて今に至るまで残つてゐる。春の芳野に櫻を賞玩する人は、その歸途、下市の鮎屋を訪づれて、アノ庭内にある維盛塚や、若葉内侍社や、お里の黒髮塚、權太手植の梅などを拜觀して淨瑠璃情調に浸つたものである。

然かしこの彌助鮎屋は、千本櫻の戯曲から生れた新名所ではないかと言つた人もあつたが、それは思ひ違ひで、鮎屋の段切に「大和路や、吉野に残る名物に維盛彌助と云ふ鮎屋今に榮ふる花の里、その名も高く」さあるから、既に此作上場當時に存在してゐたことは確かで、作者は却て此の名物鮎屋を作中に採り入れて評判を取つた譯である。

問題はないが、私は先頃、古い書物をあさるうちに、道頓堀日本橋の名物として「釣瓶ずしの」名が目についた。それは享保頃に既にあつて、鶴屋の饅頭、天満の大佛餅と並び稱せられ、釣瓶形の容器に盛つたもので、それは二つ井戸から考へ付いたのだと云ふのである。想ふに如才の無い、敏感そのものゝやうな作者出雲は、下市の彌助鮎と、日本橋の釣瓶鮎とを調合して、人氣取りに利用したものと見へる。釣瓶鮎屋には、或はお里と云ふ愛嬌のある娘が實在したのかも知れない。

鮎屋の極道息子權太の名が、また奇妙な存在である。大阪でも云ふが大和殊に下市や上市あたりでは、悪戯れる子供を叱るのに「こん太め」と云つてゐる。淨瑠璃の假の名稱が民俗語と化して傳播したものか、實

際權太といふ息子が在つたのを、作者が借用したのか。どちらにしても、下市に程遠からぬ瀬の上村に、私が二十年前、石ころを積んだばかりの見すばらしい權太の墓を、探り當てたのは事實である。その後、土地の有志によつて立派な墓碑が建立され、その刻名を囁されたのも嘘のやうだが本當の話である。

その瀬の上村の東、六田から吉野山へ上る舊山路の五丁目に當るころに、五丁目狐と云ふのがあつて、武者姿で現れるといふ、これが道行に出る狐忠信の粉本らしい。靜御前の初音の鼓は、近松の「天鼓」から生れたものだが、その鼓が吉野山下の御園村金藏院家に現存すると聞いて、遠路わざわざ尋ねたが、其家は没落、鼓は大阪へ賣つたさ、化かされたやうな笑話もある。

## 白石噺の作者

白石噺の揚屋では、可愛らしい信夫に、思ひ切つた色氣のない奥州訛りを使はせたのがヤマでもあるが、これは作者の烏亭焉馬が親しくした吉原の花魁の客に奥州の人があつたので、それから習つたのだといふ。

焉馬は又、五代團十郎と義兄弟の中で、談洲樓と名乗つた程。それで特に勝れた團洲の辯舌を移して、惣六の意見場が工夫された。しかも此大黒屋惣六のモデルは、焉馬が狂歌の友人であつた吉原大黒樓の主人秀民であつた。

焉馬と合作した組上太郎といふ作者は、紀州の三井の主人治其右衛門高業といふ富豪、焉馬は江戸の大工の息子、この二人の合作が全盛宮城野と田舎娘の信夫とであつた。

天明元年十一月、北堀江座興行に櫓下豊竹此太夫等七人が奇抜な掛合で勤め、大入六ヶ月を續けたこともある。先代南部太夫の得意藝、この追善興行に故人の美音が偲ばれるのもなつかしい。

## 大文字屋の味

大文字屋は、豊竹座作者菅專助の名著であり、また櫓下の名人此太夫の傑作でもあつた。專助は此太夫の柄に嵌めて書き、此太夫は專助の作によつて活かされた。合那がそれである、お染久松の質店がそれである。桂川の帶屋もそうである。大文字屋は、左前に傾きかけた船場の大家の家庭を描いた名編で、ごこやら大近松の匂ひのするシンミリとした人情劇である。その役々の言葉に、心持を滲み出すところに、皮肉もあれば

藝の面白味もある。榮三、母、お松、助右衛門、忠兵衛など、各自が登場して此一場の悲しい雰圍氣を作り上げる。傳九郎の題號や權八のチャリで、末段を明らかに轉換する。これも悪くはない。

### 弘法大師と戻り橋

「弘法大師いろは物語」は、大師記念劇として撰れたものらしいが、文化四年二月、佐川藤太の作。大近松のいろは物語を本尊に若竹笛躬等合作のいろは行狀詔讀州屏風浦の作を脇立にしてこれ上げたもの。但し今度上演の「貧女の一燈」の段は、全く讀州屏風浦に據つたもので大近松とは無縁法界である。筋附は鶴澤友次郎氏の善の綱から成る。

戻り橋は、先興行の勸進帳と同じく、歌舞伎畑から移した曲である。

勸進帳が長唄地で市川團十郎の物なら、戻り橋は常盤津地で尾上菊五郎の物だと言ふ違ひである。年輩の方々は、菊五郎の小百合、左團次の綱幸藏新藏の郎黨などを、この舞臺に想ひ起さるゝも一興であらう。

の 前 座 樂 文

# 一 樂 ヨリ カ ン

三四七三塙船話電



吉原揚屋の段

竹本 南部太夫  
野澤 吉 彌

人形

傾城 宮城野 桐竹紋十郎  
傾城 宮里 吉田文作  
傾城 宮柴 吉田光之助  
妹 おのぶ 吉田扇太郎  
禿 しげり 吉田榮之助  
やり手 お政 吉田文之助  
大里屋 宗六 吉田玉次郎

第一 碁太平記白石齋

新吉原揚屋の段

この淨瑠璃は安永九年正月江戸外記座に上場されたもので作者は烏亭馬場、紀上太郎、容揚齋の三人合作。

その内容を申し上げますと、奥州逆井村の百姓與茂作の姉妹が貧苦のため江戸新吉原で遊女となり全盛を謳はれてゐるに、郷里から妹の信夫が姉を尋ねて来て偶然の機會から姉妹が邂逅します、姉の宮城野は妹の口から父の横死を知つて敵討ちを決心しましたが揚屋の亭主宗六から曾我物語を例にして却て懇ろに意見されるさいふ筋で御座ぬます。この實説は松平陸奥守(仙臺侯)の家老

片倉小十郎の劍術の師範に田邊志摩さいふ者があつて享保三年中白石在領内足立村の百姓四郎左衛門のために行列を破られたので四郎左衛門を無禮討にしたがこの時四郎左衛門に娘があつて深くこの事を無念に思ひ陸奥守の劍術師範瀧本傳八郎の許に傳手を求めて姉妹共に奉公し六年間劍道を修業し瀧本の助太刀で享保八年仙臺白鳥明神の境内で首尾よく敵志摩を討ち取つたさいいはれてゐます。

新吉原の段

M 入相の、鏡さへ早く暮れ果て、廊の中は萬燈會、歌舞の菩薩の色揃へ。わけて全盛宮城野が、部屋は上品奥二階、算筒長持鏡臺の埃取迄綾

錦、福さなりけるありさまなり。此君の一字なり共次の間から、宮里宮柴打連て。詞太夫様御機嫌わへ、ホンニさつきに貸本屋に参じて、先度の曾我物語の次じやさいふて置いていんだぞへ。イヤ申し宮柴様、今日のお客は仲の町の馬屋から、彼からんだ二人一座、宮城野様はもさよりお前も早ふ身仕廻して。オ、せわしな、今身仕廻をするばいな、併し差合な顔はないかへ。イ、エこれも侍衆、一人のお方は器量よし今一人は髯むつちや、目の大きい熊か人がさいふ様な、ごちらへ札が落ちやら、いやな事ではないかいなご何國の浦も客噂、そしるも廓のならはしかや。詞ア、コレ、そんな事いふて遣手衆も呵ろぞへ。オ、呵つ

たて、あたおかしい、イヤおかしい次手に、きのふ旦那様が、淺草で抱へて戻らしやんした奉公人、おかし物いひではないかいな。サイナア遠い國から姉を尋れて上つたこの話し、宮城野様の慰みに、連てきてお目にかげう、お前もお出で連立つて行く後かげ見送つて。詞テモ扱も、わざん、獨り物いふて、マアよい氣ではある程にの。コレくしげり、そなた其處らかたづけやよ、いひ付る間もありやなし、新造二人が伴ひに、いやがる者をむり無体、突出されたる田舎の娘、傍きよるきよるつひに見ぬ、錦の小より三つ蒲團、興さめ顔に。詞オヤくく女郎さあ達、人が寝そべつて居る處を、用さア有來さらへさ、二階さあぶち上て

こりやマア何たる所だ。ごこもかも光り申て、おしやくの櫛さあ見る様に。塗こべえた簞笥さア、其上に夜の物も金布たもじやア。蒲團も蘇放染の色のよさ、私らアれまつたら、あくこの餅さア引かゝつてうつ切べい、おやつかなたまげ申すく、さ言ければ、打轉る程おかしさかくし。詞コレそこなお子、お前の故郷國所、爰へどうしてお出た譯、咄して聞かさんしよば、お力さもならうにさ、なぶるさ知らずしく泣。詞オ、やさしな詞おいやり申す、私ら國さア奥州、だアアやがアまに様子有つて別れ申して、お江戸さあはあらく盛る處だア聞き、其うへ姉さア此吉原の名高い女郎さアに成つて居さるさのはなし、女わらじの身

さして敵ない思ひをして、尋ねてく  
るも、海山物語りの有事、聞いて哀  
れを添てたべ。詞オ、モ何を言ふじ  
や、ら、すつきりと譯が知れぬ、そ  
して吉原で名高い女中を姉様とは、  
雲つかむやうな尋れ物。サアそれだ  
から頼み申すは、昨日観音さアで目  
眼のおつかない人が、連れて行つて逢  
はしてやらうと、籠さアに乗せてく  
る所な、是の御亭の世話さアに成り  
申して夕から居申す、脚かけ申すも  
他生の縁、ほんで御座るわよ、赤は  
らばたれ申さぬぢやア。ホ、聞いて  
ばきくほどおかしい咄、そして今の  
赤ばらとは、あられもないと若い同  
士、糖もくづる、高笑ひ。知る人ぞ  
しる宮城野が、押しづめて申しお二  
人、浪花の葦も伊勢の濱歌、所々で

かける物言。其様に笑はぬ物、詞今  
あの子の言つてじや有つた、だッア  
やがアまといふはな、爰で言ふと、  
様か、様、又赤ばらさいふてじやほ  
嘘はつかぬさいふ事じやわいな、扱  
つてもむをれよふ御存じ。オ、知つ  
たもむりか憂臥は、夜毎日毎にかは  
る枕、心つくしの果は愚か、奥のさ  
るくのお客にも、馴親しんだ身の一  
徳。詞オ、其のお客で思ひ出した、  
奥のお客がやかましがる、私も追付  
けそこへ行く、先へお出てよい様に  
コレくしげり、仲の町の井筒屋へ  
行ての、昨日の返事聞いておじや、  
早うくご云ふ下から、遣手の政が  
例のしやぎり。詞奥のお客のお侍か  
ね、何咄して居さんすぞいのう。オ  
いせはし、そんならわしらも奥へ行

て、御客選らみのえようもいはず、  
寢そべる度にア、何やら、オ、それ  
赤ばらたれて氣に入つて、日から頼  
もと口々に、いふて座敷へ行くふり  
を、見やる宮城野しのぶが傍。もし  
やそれこそ擧よつて。詞さつきにか  
らの咄しを聞けば、姉を尋ねる人さ  
うな、奥州はごこの生れ、何さい  
ふ所じやへ。詞アイ奥州は白坂近在  
逆井村さいふ所。フン其逆井村さい  
ふ所に、奥茂作さいお人が有らふ  
かの。アイサ、其奥茂作さいふのは  
めらしがだも、あそんならわしむ妹  
さ、繩り寄るを突退けて詞イヤく  
く、がアまの常に云はしやるには  
姉さアの方にもしるしが有る、それ  
を證據に名乗合ひ、委細心底打明ろ  
さ、云しめた、それが有るなら早う

つん出し、見せてくんされ姉さアこ  
なつかしなから油断なき。オ、桐巧  
な人、疑やるも尤もさ、立て筆筒の  
袋棚、襖開けばうやくしう、淺草  
寺の觀世音、扉表具におしならべ、  
かざり置いたる筒守り、見るに妹も  
疾く遅し、首にかけまく壺井の守。  
詞コレくく、此姉が國を出る時  
か、様が大事にせいさ下さんした、  
此守さ、様は桶家の御浪人故、河  
内の國壺井八幡様のお守、それを持  
つて居やるからは、妹じやく、コ  
レく、よう顔見せてたもいもう。  
オ、姉さアでござるかいの、逢ひた  
かつたさ諸共に、嬉しなつかし繩り  
寄り、外に詞は泣く計り。斯ぞさい  
ざや宮城野が、座敷へ出ぬをふしぎ  
さに、來かゝる亭主宗六が、様子有

りげな部屋へやの体てい、忍しのんで事ことを立聞たちきく  
さも知らず姉妹あねいもうとひそく話はなし。詞オ  
い妹、よう尋たづねて來てたもつた、年  
端はも行かぬそなた、さ、様成さんなり、か  
も様なりさ、いづれぞ付ついてお出で  
あらう、もし道中どうちゆうではぐれてかご問  
はれてわつさ聲こゑを上げ。詞ア、コレ  
くく、斯うめぐり逢あふからは、  
悲かなしい事ことも何なんにもない、泣ないては濟すま  
まぬ、サアどうぞさ、尋たづねる姉あねの心  
もそやる。詞エ、遠國えんこく隔へだつた姉あねさア  
それで何なんにも聞きかないナ、だ、ア五  
月がつ田た植うえの時じ分ぶん、代官だいかん志賀しが壺は七しちさいふ  
悪侍あくじに。ヤアヤアく何なんさいやる  
打切うちきれてお死しにやり申ました。ヤアさ  
悔ひり差込さしこむ癩か。詞さつさモウ悪い時とき  
そしてどうじや其跡そのあとは、サアおらだ  
けもすでの事殺こところさる、所ところ、庄屋ぢやうやの伯お

父ちちが駈かけつて來て、りきんでみても肝  
心の、證據せうこたければだ、アは犬死いぬじ、  
雉子けしと鷹たかなりや敵討かたきうちの勝負せうぶもならず  
すごらく、そんだの言號いひなげの御亭ごていに  
も對面たいめんはしたれども、是これも此江戶このえどさ  
あへ歸かへり申ます、跡あとはおらだけさア  
まさばかり、頼たよりない身に下地したちの大病たいびやう  
ヤアお煩わづらひでもあつたかいの、シテ  
御本腹ごほんはらなさつたか。イエく六月十  
六日いちじふにに悲かなしや終つひにお死しにやり申ました  
ヤアく御養生ごよせうじやうも叶かなはなんだか。ハ  
ア、話はなしさあ聞いてさへ、そない歎なげ  
かつしやる物もの、じぎに見みさらべたお  
らだけが心こゝろ、エ、コレ、泣なかつしや  
るは道理どうりだければ、頼たよりに思おもふ姉あねさア  
又病氣またびやうきおこしては猶なほか濟すまない。イヤ  
く、イヤく、中々なかなか煩わづらふ様な事ことじ  
やない、そしてどうじやく。サア

なじよにもかじよにもおらだけ一人  
庄屋の伯父さまが引取つて、奉公し  
ろと云ひめすけど、何の奉公所かい  
口惜いさくやしいで、跡先思はず且  
那寺へかけこんで、詞坂東願禮する

さいふて、笈摺もらひ國元を、つゝ  
走つたもそなたに尋ね遇たら、姉妹  
心一致に仕申して、だゝアの敵も討  
ちたいばかり、道中すむらの艱難も  
そなたにあはぶお樂しみに、詞かい  
に苦勞さば思はなんだ、併し逢ふた  
らかつぱりさ、しよつ骨が抜けた様  
な、コレそない歎かつしやる手間で  
妹はるんく尋ねて、よう来てくれた  
めこがめらしさいふてくんさい姉さ  
アさ、あやも泣き入る稚氣に、長の  
旅路の憂苦勞、思ひやるせも宮城野  
に、つゞくはすゑの松山を、袖に涙

越す涙なり。歎きの中も、姉は猶、妹  
が脊を撫おろし。詞オ、其様に思や  
るす尤も、併しそなたは父母に、長  
う添やつた身の果報、此姉を見やい  
のう、年貢にせまつて、さゝ様は、  
水牢、其苦を助けうはつかりに、コ  
レ此廓へ身を賣つたを、思ひ返せば  
十二年、そなたは五ツ子顔さへ見知  
らず、さゝ様の御最期や母様の死目  
にも、逢はぬさいふ悲しい不孝なは  
かない事があらうかいの、斯うした  
事は露しらす、此妹は健な知ら  
ぬ、さゝ様か、様お煩ひでもあらう  
なら、よもや知らしてたもらふ物、  
便のない杖柱、首尾よう年を勤め  
たら、國へ歸つてお二人に、樂させ  
まして、ごうしてさ、色や浮氣を着  
んで、勤め大事と言號の、殿御の事

も、そなたの事も、戀しなつかし思  
ふのを、たのしみ暮したかひもなう  
名乗逢ふたば嬉しいが、悲しいはな  
し聞く姉が、心も推してたもいのさ  
手を取交はす姉妹が、涙々を立聞く  
も貰ひ泣して立わけの、暖簾もぬる  
ばかりなり。つゝもる話に富士の山  
かすく多き涙の隙。詞こんな事聞  
ふはしか、借て讀んだる曾我物語、  
兄弟の人々も、終には父御の敵討、  
コリヤ泣いてゐる所じやないわいの  
ア、是肝心の事を忘れてゐた、此姉  
の言號の夫、此江戸にあやしやんす  
この話し、其お方の名所、定めて覺  
えてゐやらうのう、そりやせばしさ  
に、何も聞かない。オ、モそれを知  
らぬさいふ事があるものかいの、そ  
ふいふ事なら敵の顔も。それ知らな

いでよい物か。目眼のでつかかな鼻の  
 ひらたい男ぶり。モウよい／＼壁に  
 耳、御浪人こそなされたれ、由緒た  
 いしい武士の娘、オゝめらし姉妹じ  
 やて、おのれやれ敵討いで置かう  
 か、オゝよういやつた、出かしやつ  
 た、幸ひ奥の大騒ぎ、あれに紛れて  
 此家を立退き、さうじやく／＼と妹が  
 帯しめ直し我身も共に、小袂かいし  
 よげ身ごしらへ、立退かんとする所  
 を、暖簾引切かけ出る亭主。コリヤ  
 ご／＼へ。おゝ且那様のいつの間に。  
 おりや最前から、アイや、たつた今  
 爰へ来た。か、わがみ達ば敵、サア  
 かたい約束の男が有る故、こゝをか  
 け落、コレわるいぞや／＼、そして  
 マア其田舎娘を知つて居やるか、ア  
 イ、イ、エ。知るまいてい／＼、昨

日淺草でかゝへて戻つたわいのう。  
 旦那様私らが今の咄し。サア聞い  
 たでもなし、聞かぬでも。それ聞か  
 れたら赦さぬぞ、突出す懐劍、さす  
 かの姉妹、鏡臺の、鏡追取りてう／＼  
 はつし。詞ヤ何ぞ違ふた物か、違は  
 ん物ばそれ姉妹ナ、此鏡臺の鏡に移  
 る二人の顔、似たりや似たり、花あ  
 やめ杜若、其五月雨のくらき夜に、  
 敵を討つたる曾我兄弟、假名本の曾  
 我物語、爰にあり合ふこそ幸ひ、お  
 れが讀んで聞かそう、光陰おしむべ  
 き時、人を待さるこそわり、日間行  
 駒つながぬ月日重なりて、一滿は十  
 三歳に成にけり。詞ナ此道理、河津  
 の三郎祐重といふ有名る勇者、大名  
 の息子殿でさへ、五ツや六ツの比よ  
 りも、思ひ立たれ親のかたき、なみ

大ていの事でなければ討れぬ者じや  
 コレマ聞きや、大名の後宇共云はれ  
 る人が、曾我の太郎祐信殿へ、二度  
 の嫁入せられたも謀、又息子の箱  
 王丸を、いとしなげに坊主にせうと  
 言はれたも、敵工藤経に油断させ  
 う爲計り、其年月の憂艱苦、詞無念  
 口惜い事の有るぢやう、是迄、何ぼ  
 も芝居の狂言に取組んでして見せる  
 繼爺の祐信殿も大名、役に立すの貧  
 乏人さ、後ゆびをさゝれたも兄弟の  
 子供衆に、實父の敵を討せたい武士  
 の意氣地、こりや是陰徳と云ふ大義  
 心、其上へ鬼王床司左衛門といふて、  
 伊東家の老臣が有つて、幼少な子供  
 衆に、晝は終日劍術稽古、夜もすが  
 ら机の上、忠孝の道を教へ、成人の  
 後に及んで、兄貴を十郎祐成、弟御

を五郎時致と名乗らしたも、北條殿  
さいふ烏帽子親が有つたさかい、近  
いたさへは、おれが様な不粹むくつ  
けな親方じやと思ふてたもるし、こ  
つちも又抱の奉公人じやと思へば、  
何事によらず引けを取らしこむない  
ア、こんな事は言はいでも知れた事  
じやが、今の様な咄しを聞けば、お  
りや見通したい、コレ爰をよう  
聞きや、首尾ようそなたが逃果てか  
らが、悲しい事は遠國生れ、しつか  
りとした心當もなうて、江戸中をう  
ろつきやるを、内人の者共が見付、  
何所そこにあますさいふ事を聞いて  
ア、いよいよ打捨て置けさば、親方  
の身でどうもいばれる、そりやモわ  
がみ達計でもない、此廓へくる奉公  
人に親孝行か、夫のためでない物は

一人もない、あれも孝行じや、これ  
も貞女じやま、それなりけりに仕廻  
ふては、こつちもおやま商賣取置か  
ねばならぬ、おれに成人の息子でも  
あつて、抱の新造呼出したり、色狂  
ひに身を打つと聞けば、ヤイ極道め  
ばいまくつてのける勤當じやま、強  
異見する親の身が、人様の大事の息  
子殿が見えるさ、きやつ放錢じやわ  
いの、コレ頼もしさうなお客じや程  
に、随分大事にかきやま、智慧を付  
る、マ此様な得手勝手な商賣はなけ  
れど、こりやも浮世の身過世過、さ  
ういふ身分な此おれでも、慈悲と情  
さいふ事は、不斷心に忘れせぬ。  
まちよつさいふて見様なら、此惣六  
は最前いふた、鬼王庄司左衛門じや  
と思や。外に烏帽子親の北條殿とい

ふ様な、後桶でも出来てから、ヤま  
つきの様に思ひ込んで、突かゝつた  
懐剣、おれにさへついで落される  
様な事では、まさか敵に出合ふ時  
すつぽんの間にも合ぬほごに、おれ  
がいふ詞に随ひ、コレ、此道をも  
稽古して、鍛錬の熟した上では、ぐ  
つとく、尻持つ合點。コレ駈落の  
尻もつて行かふさはいふまい、急く  
所ではない程に、大事の勤め、駈落  
しようとは無分別、お客大事に勤め  
ても、合點がいたかま、つとく  
に、曾我物語の引く、諺切講釋  
一方を、頼もしげある亭主なり。二  
人は飛立つ、涙、身にも胸にもあ  
り餘。エ、ありがたう御座んすこ、  
姉が拜めば妹も、只伏拝む許りな  
り。詞、オ、嬉しいのは尤も、義を見

てせざるは勇なし、わがみ達の様な  
 奉公人見立て、召かへたこいや、  
 仰山なが、おれが目鏡もおよそ違は  
 ぬ、禮いふ事も何にも及ばぬ。是  
 人の目鏡に悟られぬ様、随分共けは  
 ひ化粧も美しくして奥の座敷へ、ソ  
 レ遣手の政はあぬか、湯をもつて來  
 てやれいやい、しげりはあぬかと呼  
 出して、言ひ付るのも賣物に、花も  
 美もある響の惣六。生粹の淀まぬ座  
 敷は大騒ぎ、牽頭末社が弾く三味に  
 乗つて呑むやら諷ふやら、現たはひ  
 の喜見城、意見上手の親方が、こも  
 る情に宮城野も、妹を部屋に奥座  
 敷引別れてぞ、三重  
 M 入にける。



大及御池橋

茶 笠 本

電話新町二六二番



た大師様の御和讃唱へて敷入せう。  
 ドリヤ往にませうと銘々に地口輕氣  
 がる足むるに歸る軒端も暮近き燈し  
 油の荷ひ賣。油よふござい。地油々々  
 門口から。詞お谷様何してぢや。多  
 度六は内にいるかご。地云ひつゝ這  
 入をお谷は見るより。詞イーエナ、  
 何やかやの才覺に。エ、れその工  
 面に出て留主か。コレこな様の短い  
 舌で吃り廻つて頼まんすがいさし  
 大まいの金三兩さいふ物取かへた驚  
 の巢の志渡兵衛。多度六に催促して  
 も。モ何のかのど将が明かぬ。けふ  
 はめつきしやつきする氣で留守の間  
 へ仕かけたもコレ。こなさんさいふ  
 戀が有る故コレイナアごふしてお  
 けるぞいな。幸ひ傍りに人もなし。  
 地ついちよこゝと拖付手先を拂ひ

詞エ、メめつそふな。ナ、何さしや  
 んす何ぢやめつそふな何さしやんす  
 イヤめつそふな何がめつそふ。コ  
 レ胸すみて此首だけはり込で居る志  
 渡兵衛ぢや。ツイうんさ云はんすり  
 やよし。又いやご云はんすりや金の  
 かはり。屋財家財引くりかへして。  
 見付次第金儲になる代物を引つさら  
 へて連て行く。サアいやか。應か返  
 事はごふぢやご上り口。地腰をす  
 たる高ゆりす。地何と返事も手詰の  
 難儀。若し家さがしられては主君  
 の身の上夫の仇。戀さ愁まにかけら  
 れし。憎さ悲しさやるせなく涙より  
 外詞なし。地胸を定めて詞ソ、其  
 返事は。コ、ス、地指先でかく  
 さはいざや白浪に。深ふ胸の多度六  
 が戻りかゝつた我家の軒。詞ナニ何

書しやるエ、何ぢや、數ならぬ身を  
 お心ざしは嬉げれど、主ある身なれ  
 ばお赦し下され候て申兼候へ共。大  
 師様の萬燈會に上げ候。燈籠の油。  
 御無心なむら。私に下され候は  
 忝く候。エ、いやぢやはい。何  
 のこぢや。頼む事は聞入れず。まだ  
 代物をおこせまは餘りあつかましい  
 はい。サアソ、それは御尤  
 地さ又かきならす鳥の跡。詞ム、萬  
 燈供養社濟候は。又思案も有べく  
 候。へ、ウ、ハ、ハ、ハ、そりやア  
 ノへお前。實誠に眞から。ほんまか  
 へ。コレ眞實叶へてくれる氣なら髓  
 な心中を見せさんせご。地いふにお  
 谷は立上り。傍に有合ふ出及庖丁。  
 見るより愉り。詞コレコレ、  
 出及庖丁の心中さば。手ばなし

た事何するのぢや。ア、アイ心中は  
此通りと島田ほごいて根元よりふつ  
と切つたる黒髪を、油のかはりさ  
し出し、詞コ、是で私か。ネ、願ひ  
をばカ、叶へて下んせ志渡兵衛様と  
地涙はらへ亂れ髪。大象ならでつ  
ながれし。鼻毛延して現なく、詞ハ  
、ア出来た。萬燈共養仕舞つたら。  
日頃の戀の大願成就エ、忝いわい  
證據の切髪受取つた。燈油はお望次  
第。其かはりにはコレ合點か。そんな  
ら鳥渡手附にさしがみ付たる後より  
首筋揃んで頭轉倒。恠り女房が切髪  
に袂を覆ふ斗りなり。詞アイタ、  
コレモ扱も。顔に似合ぬごゑら  
コレマいた嬉しい、ヤ、多度六か。  
憎い不義者そこ動くなと、地云はれ  
てまた震ひながら。詞何ぢやい

不義者とはそんな不埒な事した  
覺ないぞヤア覺ないさ泥坊め。體  
證據はコリヤ爰にぞ地手をさし入  
れて懷より引出したる以前の髪。詞  
コリヤ女房が此切髪ごふして又我が  
持てゐる。サア夫は。チ、そうちや  
油代のかはりに、エ、ぬかすまい始  
終の様子は見届けた。主有る女房に  
不義いたづら了簡ならぬと件の出又  
地追取てひらめかせば、ア、こり  
や、とてつもない。まだ  
お庭さへ踏みもせず。髪と油さかへ  
たは塵が誤り代はコリヤごふなとせ  
う。ム、スリヤ不義の誤りに。一札  
書すが合點か。ハテ命かはりぢやご  
ふ成るさ。チ、よい覺悟ぢや。サア  
きり、書さ。ふところより鼻紙取

出しなげやれば、筆取上てエ、誤り  
證文の事サア一つ其元内儀お谷殿と  
不義仕り。ア、コレまた不も義も  
仕やせぬ物を。不得心なら是で突ふ  
か。ア、コレ、書くわいの。心  
心中に髪切らせ候所實正也。然る  
上は、用立置き候金三兩は申に及  
ばず。油荷一荷相渡しコリヤ、  
油荷渡ししたまる物かい夫取ら  
れたら商賈が出来ぬわい。ム、ス  
リヤ儕、命かなふても商賈さらすか  
サアそれは。たはげ者めか。こまご  
ま言はずと書きおらふハイ。サア命  
を御助け下され。有がたく存じ奉  
り候。エ、夫が何の有難がるぞひ  
借した金に油荷迄。いやなら是で算  
用せふか。ア、コレ、氣の短い書

くわいのく。お定りの三百目、大かたそこらな物で有るぞ。地筆もぐにやぐ書仕舞ひ。詞サア多度六是でえ、か。エ、命冥加な泥均め、きりくうせうと地戸口へごつさり投出す切髪。コリヤ油代に渡したら儂が物ぢや持てうせい。エ、思々しい。此髪見見たふもないわい。シタが、是も其人の篋と思へば、猶なつかしき油の移り香さいふ古歌の心。金三兩油荷一荷のかはりさは。油むごいさ地つぶやきく。枵は有れど擔ふべき戀の重荷もたくられて、肩に拍子も投首にしほく。我家に立ち歸る。

(床本) 貧女一燈の段 (次)

地萩吹風の音づれて。いさど淋しき

夕間暮。妻は灯かゝげつ、軒にかけたる燈籠の、灯影照せど。胸の闇。地暗れぬ思ひに夫の傍、此切髪をお前に疑はれるがわしや悲しと地いふも涙に袖しぼる。夫は不慙と顔打守り、詞コレお谷更々疑ふ心はない。モよしない縁に繋がれて貧苦辛苦の上。御主人の命乞、燈明代に黒髪迄、切つて捨たる切なる心、コリヤ。過分なぞよ女房共と。地いふも涙にくもり聲、詞そんなら私の心の内、サア推量して居るわいの。エ、嬉しうござんすちの人と。地膝に取付きないじやくり。洩聞えてや。世を忍ぶ。蟹の苦屋の間より。立出給ふ小野の篋。重き病ふのいたつきに。力なき身でいたはしき。地夫婦は、つみ座を下り。先程か

ら用事有て外へ出で。御機嫌も伺ひませなんだ。お御氣分はごぶでござりますな。見ますればお顔の色がわるい。地何ぞお氣にさはりしやま心にかくれば篋。二イヤ左に有らず。我都にて無善悪と額に書しを識者の爲悪無くばまからんご訓みかへたる無實の罪。死すべき命をそちが情。地取分けお谷が食しき中朝夕の心づかひ。表具かゝれさてしも櫛削りなでにし。髪も切捨て。世になき我が病ふの祈り。御燈を捧ぐる大師の供養。アノ外面なる闇覺王。娑婆の善悪邪正をば。糺し給はる誓にも、洩し此身の淺ましやき、悔み涙にくれ給ふ。詞ア、去りさてはお氣の弱い。あなたの御名代には此多度六。間かな隙かな闇覺様へ。善

悪分けて依人共を亡し、あなたを御代に出します様に。大願込めて祈つております。コレ何にもお案じなさるゝなご。力を付くる多度六。お主思ひぞ眞身なる。地お谷も共に。詞それく。早ふ御本服なさるゝやう。大師様の萬燈供養、追付驗がござりませう。オオそふ共く。シタむ。何ぼう残暑と云ひなむら、吹放しの烈しい浦風。地お風召すなご共々に、夫婦がいたはり介抱も。如才納戸に連て入る。山の端。出る。月影に。文彌道は照らせご目なし鳥啼に歸る母お丈。ナホステ。手を引く孫が小りしく。詞コレ祖母様。モウこちの内ぢやはいのふ。オオ嬉しや。コレ朝吉。跡から誰も來やせなんだか。アイこはい伯父が來たけ

れど。皆ごこへやらいきました。ヤレ夫は嬉しや。地さはいへ油断はなまるまいご。ふさがる吐胸門の戸を明けて這入ば朝吉は。詞嬢様ごこにあるやつしやる。乳がのみたい乳呑まふ。地納戸の内へ走り入る。地母は邊りを撫廻し探り廻りて獨言。思はずけふの都の討手。志渡兵衛が訴入して。篋様の御身の上。此曉迄御容赦ご。當座のがれに歸りしは御身がはりを立てん爲。さいはへ高位都人のかはりに立つべき者もなし。一人息子の多度六は、海邊育の荒くれ男。嬰さ知なばんの大死。嫁のお谷に得心させ。いつそあの子を殺そうか。さば云へ不惑や貧しい中。夫を大事此母に。地朝夕つくす孝行者。殊に子も有る女夫中。何ご命を取られう

ぞ。成らう事なら此母が。かはりに立てお主の命。助る事はならぬかと返らぬごをなくご泣き。地ア、何させん是非もなや。三人の内に一人の命。どうて遁れぬ定り事。詞兎角佛のお力を。地六字を杖に、タタキ盲目の。探る手先きに一間なる。持佛の間へご入にける。

(床本) 貧女一燈の段 (切)

地生死の境夢の世に馴し衾は鴛鴦の諸羽かされの夜半の床。きぬくならで肌薄き。地妻と別れに惜まるゝ涙に保つ一腰の。切放れよき男氣もかき曇りたる。胸の闇。地内外見廻し獨言。詞今母者人の云はるゝを聞けば。篋様の御身の上、若しもの事が有る時は。つくした忠義も水の泡

お谷にさつくさ云ひ聞かし。不惑な  
 ちらお身がはりさ。地思ひ込んだる  
 心の底。しらぬ。お谷は納戸より眠  
 る我子を抱く手も。いさたゆげにぞ  
 立出て。詞晝のアーあがきに草臥て  
 もふ寝やつたか。ト、いざ、チ  
 いちつこの間さ地下に置き、蒲團打  
 着せ夫の傍。詞コレ多度六様おま  
 へはナ、何を思案してイ、居や  
 しゃんす。オ、女房共。坊主めは寢  
 おつたか。アイアイ。コレ。そなた  
 に折入て無心があるか何ぞ。聞てた  
 もらぬか。アノマ。女房に改まつた  
 イヤサ。折入て頼まればならぬさ  
 いは外でもない。そなたの命が買ひ  
 たい。エ、ソ、それやナ、何で  
 オ、悔りは道理々々。御主人の篋  
 様。けふにつまるお身の上。それ

故に母者人の心づかひ。詮方なきに  
 そなたをば。御身がはりさ思ひしも  
 前世の因果。約束事と諦めて。潔  
 ふ死んでたも。地さ立派にいへど風  
 愛の。涙に妻も顔を上げ。詞コレ  
 ちの人イ、いさしいお前の忠義の  
 爲。何の厭はふいとやせぬア思へば  
 最前切つた。コレ髪が。オ、思ひも  
 寄らぬ燈明の價に切し黒髪は。取り  
 も直さず冠下。お役に立てよと神佛  
 の。おしらせで有ふぞい。サア。イ  
 一賤しき身にて高位にかはるは。ウ  
 一嬉しうて。地嬉し涙が。と  
 一跡は詞も袖覆ふ。見るに夫も不惑さ  
 の。涙を包みオ、そふちや。詞變  
 生男子の果を請て。未來成佛疑ひな  
 い。冥途の闇を照すには。お大師様

の萬燈會。迷はぬ様に唱名をさ、地  
 破れ障子を押ひらく。善通寺山かう  
 ぐさ。程を隔てし萬燈會。こなた  
 の軒に。輝くは實も貧女の一燈に。  
 無明の闇もてらすなる。平等大會ぞ  
 有難き地。盡きぬ名残さ多度六が。詞  
 お暇乞が濟んだらば。母者人や坊主  
 めが目を覺さぬ内に。云ひ置く事は  
 何にもないか。フ、アイ。ト、得  
 心はして居れど。オ、お胎に結ぶ。  
 岩田帯。モウ七月。コレ、此や、  
 を。地間路に。迷はず。いちらしさ  
 ワ、わしや。ぐさ云ひさして  
 わつと叫げば朝吉がほつちり目覺  
 す寢ほれ顔。詞サアねんれして乳呑  
 ふさ。地やんちや交りのぐわんせな  
 さ。詞コレヤ坊主よ。是を見い。嬢

の此髪がこないに短ふなつた故。おれが味よふしてやる程に。賢い者ぢや。サアくちやつと乳を放せヨ。ム。そんならかゝ様の短い髪を。おまへが長ふして下さるか。オ。長かれと思ふても。親子夫婦の短い別れ。無理云はずとも遊んで居い。アイ。おれはあそこの佛様の前へいて。いつもの様に石積で。太鼓たいて遊ぶ程に。嬢様歌をうたはつしやれ。コレ。これ叩いて。地取出す。手もこもりんと持遊びの。太鼓さつかは。折々に。詞此頃覺はし。タタ大師様の御和讃を唱へるも。コレ。コレ此舌をまんぞくに。おまへや坊にも心よふ。ネ。地寝物語りも。ナ。成ふか。詞現當こ。二世の願込してア。あの子を村手

に。モ勿体ない。地大師和讃と子守歌。詞こ。後世の爲。現世の名残。おれも用意の其間。サアく。地早ふさ手に渡す。輪廻に迷ふ。親心。子はしら砂に持はこぶ。さいの河原も斯く斗り。主君さ母にしらせじさ奥へ氣配り。詞女房共。早ふ名残の御和讃を。ヤア泣しづむは今さなり忠義の二字を忘れたか。地阿り付られ取直す。りんの色も。涙聲。歸命順祖師大師。往昔大悲の願有れば。十萬世界の益廣し。中に因縁深ければ。詞ミ。見始め逢初め。様。カ。勘當受ても添たい。ネ。願ひ叶ふて添ひ伏しの一つ伏屋に二世の縁。讚州多度の郡にて。詞コ。子中なしたる戀中も。夕べの床が。ナ。名残かいのふ。屏風も浦に

跡を垂れ。武官を兼し氏素性。顯す夫が身捨へ。地妻はあこがれやるせなく。生年五六の間には諸佛と談會まし。つ。詞嬢様何で泣しやるぞ。わしも悲しう成つて来た。乳呑たいと立寄るを。ヤイ。無理いふか。いつものやうに機嫌よふ。歌をうたふての。様になぜ石積んで遊ばぬぞ。地いふ目にさへ血の涙。しく泣て立まごふ。十より内の稚子の。河原の石を。拾ひ取りタタキ。一つ積んでは。さ。様の爲に二積んでは。嬢様の爲。詞オ。よふト唱へてタ。たもつたさわつと。地泣出す口に袖を當て。エ。コレ奥へ聞へるはい千萬年添たさて。ごふで一度は別る。習び。お主へ忠義母のため。サア。地覺悟と振上る。

刀の下に子を圍ひ。マ、マ、待てこいへど。付け廻す。輪廻の切先りんの音母上別れをおしみつゝ。詞せめて此子が。おさなしう成人する迄。居らずともおなかの。やゝを。身二つに産事さへもならぬと。女心の悔み泣夫も心思ひやり。せきくる涙。くひしがる。胸は鳴戸の浦波の。袖に。渦巻ごとくなり。地氣を取り直し。詞サア時刻移ると振上る。地其手に絶つて朝吉が。かゝ様ちやつと逃げていのふ。さゝ様勘忍く。さしがみ付いたる小手からみ。突き及も恩愛に。さろけ砕くる亂れ焼。心さは立浦波に。さつと烈しき濱風。數の萬燈一度に消え。残るはお谷が供養の光

り。赫々。さして明らけき。地多度六屹つと打見やり。詞今の烈しき浦風に。數の燈籠消えたれど。おこごが一燈残りしは。忠貞厚き志。佛神憐み給ふよな。サア婆娑世界の苦を離れ。極樂淨土に快樂せよなむあみだ佛と切付る及の光半より。ほつきと折て飛散たり詞ハテ心得ぬ。少しの疵も付かずして。此業物の折れたるはばつさばかり呆れ。果たる其所へ。地小陸に忍びし志度兵衛は斯と見るより踊出で。詞勘解由様の仰を受け密かに様子を窺ふ所古手な身代り其手は喰はぬ。サアおたづね者の墓を渡せ。ヤア一大事を聞いたるやつ生ては歸さぬ。覺悟せよ

と。地又指添を取出す。詞オ、手向ひせば此悴。ほうづき首を捻ち切る。と。地稚子さらへ引寄する。腕もわなく後の方。弘法大師御手を延べ朝吉引取り志度兵衛を。庭へびつしやり立切一間。起上つて多度六に。切つてかゝれば抜き合せ。はつしと打ば志度兵衛が。刀は折れて眞二つから竹割に死してけり。地かけ上つて。詞サア、女房。覺悟はよいかさきりつくる。及は又も折散れば。多度六は二度悔り。詞最前の刀さ云ひ、今眼前に志度兵衛も、及を打折る此指添。又もや折て此如く。そちが体に立たざるは。そんなら若し私の中から不死身さやらではないかいなア。ヤアそふいやるそなたの

詞、舌もつれず吃らぬはエ、あ  
わたしが此舌がア、ほんにマアごふ  
して物がさいへごふしんの暗やらす  
いるはにほへごア、直つたくく  
コレくこの人やつぱりほんまに  
直つたのじやはいなアチ、嬉しや  
くくチ、是こそ誠に日頃信する  
弘法大師様の皆おかげ有難うござり  
ますくエ、有難い。地、忝いご悲  
しい中の、悦び涙、地、多度六ふしぎ  
の思ひ。詞、吃りの難病直るさいひけ  
はしき場所にて朝吉迄救はせ給ふ弘  
法大師。ホンニ最前朝吉をさ立寄見  
ればコハいかに人影もなくありく  
と残る六字の利劍の名號、詞、扱  
は危き劍難を救はせ給ふ名號の徳、  
大師の慈悲にて有しよな。イヤお谷  
女郎の身中には非道の及は立ぬ答。

ヤアそふいふ聲は母者人スリヤおま  
へは此場の様子。オ、立聞きした不  
思議の段々アノ名號の御利益より。  
空恐ろしき身がはりの及の立ぬ因縁  
を今語つて聞かせませふと。隠し持  
つたる懐劍を咽にがばとつき立れば  
こりや何故の生書と。夫婦あはて、  
取りすがりいたはりおこせば肩をつ  
き。チ、驚きは尤さりながら今此  
母が言事を一通り聞てたも。先君御  
寵愛の御臺所破軍星を胎内に。やご  
す。靈夢に御懷胎誕生ありし三の君  
必御心猛からん武官さなして當今の  
御守りとなすべしとて。我夫小野の  
峯守に若君の守護致せよとの御仰せ  
夫より我箱に守奉り誕生有るは御  
身の上、其節わらはも産落せし。媚  
麗しき水子に迷ひ。奮恩忘れし夫の  
悪心。人しれず取かへしは王位を奪

は入謀。今參議筆名乗は取かへ  
置しわらはむ子。誠の高貴の御胤に  
て。三の宮さ申すはコレ多度六殿お  
前の事でござりますわいのと。聞く  
に候り多度六が。ヤア紛らばしい此  
身をば高位の胤とおつしやるには。  
證據ばし有ての義か。オ、争はれぬ  
はお谷女郎の胎内にやごし給ふ孫君  
を助け給ひし天の守護。いかで及  
の立つべきぞ。又吃りの病ひ直りし  
は奇特を顯はす名號の利劍即是の佛  
の發智。ノフ勿体なや名號御影さ偽  
りて持佛の下に隠し置く。世にも貴  
き御寶を。多度六様へ奉らんお取  
次をさいふ聲にお谷が立寄る一間の  
内。御箱携へ弘法大師。朝吉連れて立  
出給へば。夫婦は又も悔り。ふし  
ぎに不思議晴ざりけり。大師微妙

の御聲にて御身正しく三の宮と疾に  
 もしれど罪深き峯守夫婦の罪滅に。  
 善通寺の伽藍の内五重の大塔建立。  
 五逆の罪を助けん。惠み尊き廣大  
 無邊。慈悲に洩れざる善通寺。五重  
 の大塔建立の因縁爰に炳然。今は  
 の手負は手を合せ。詞エ——有難き  
 御惠み。わらはは土佐の八濱の生れ  
 伊豫は夫の生國にて多度六様は讃岐  
 の艱難。お谷女郎は阿波の國。縁に  
 繋がる國々の。四國は四生六道三界  
 火宅を放れ極樂の花の臺に至らん。こ  
 いふも苦しき息づかひ。詞サア  
 申し多度六様お谷様。せめてわらは  
 り罪亡しすたぐに切てたべ。夫が  
 くさいふ聲も次第に弱る斷末魔。  
 此世の息は絶にけり。お谷は死骸に  
 取縋りわつと斗りに聲を上げ。貴人

高位の奥様か鄙の海邊の佗住居。目  
 かいも見えず取分けて。不自由な貧  
 しい營みのあげくの果はあぢきない  
 此の最期は何事と。悔み歎けば朝吉  
 が祖母様何でいたくさつしやる。  
 必ず死んで。下さるなご。うろく  
 するを見るに付け。不惑さ餘るたら  
 ちれの。涙袂にせきかれて膝に淵  
 なし。稚子の身も浮くばかり歎きけ  
 る地かゝる折しも表より詞ヤア  
 此家の者共先こく老女に申し置きた  
 る篋の首請取らん爲氷室の君の仰  
 をうけ鬼塚勘解由向ふたり早く渡せ  
 と呼はれば。  
 地一間の内より篋廻しづぐご立出  
 給詞ハア元より覺悟の我一命。早  
 く首を討たれよと地いふを打消し多  
 度六が詞アイヤく誠小野の篋

さは我事也。イヤ某こそイヤ我ご  
 地互に争ひ。詞ハア、紛らはしき  
 うぬらが詞、コリヤヤイ。よく存じ  
 たる誠の篋。首打たす懇念せよと  
 地刀に手をかけ立寄るを。大師暫し  
 こそいめ給ひ詞アイヤく篋廻し  
 討んさは汝が僻言。誠篋の罪科は  
 隣岐の國へ遠流すべきさ。市郎丸秀  
 俊へ下し給はる御論言たごへ氷室殿  
 の嚴命なればさて君の仰せは背き  
 ても苦しうないか。サア夫は地ご詞  
 に詰れどひるまぬる者。ヤ、いつ  
 そうぬをさ抜きかくる。手はなへし  
 びれ目くるめき其儘そこへ倒れ伏す  
 地奇瑞に人々驚きの。中に篋詞を  
 正し。詞今老女が物語りに、我怨敵  
 の峯守が質子なれば。流罪は元より  
 覺悟の前。三の宮には漁師の身ご。

高野山奥の院

萬燈會の場

竹本むら大夫

豊澤廣太郎

鶴澤友平  
鶴澤清二郎若

人形

弘法大師 吉田玉次郎

女房 お谷 吉田文五郎

成り給ひしも時の幸ひ。朝敵亡す一

つの方便。地必ず悟られ給ふなご。

詞の内より多度六は。詞ホーウ我進

も同じ事。始めて知つたる身の素性

兼て濁れる世をうらみ。閻魔王に朝

夕仕へ。善悪邪正を訴へし。地立願

も達しなば。追付け怨敵謀叛の族

一ひしぎに亡さんと勇める顔色威有

つて猛く質にも破軍の化身ぞ。云

傳へたるふしぎの尊体。地大師重れ

て仰有り。詞老女が末期の願ひに任

せ四國の四句の文々不動。八萬至滅

無量非。八十八箇の寺院を建て。地

猶も用ひ得さすべし。お谷が供養の

燈籠は。彼天竺の祇園精舎消残りた

る貧女の一燈。詞爰に移せし貞女の

かみ。我入定に定めたる高野山に

うつし取り。彌勒の出世を値遇せん

又此一軸は四句の文。國字に和解せ

しいるば假名。此兒に授くれば。學

びて奥義を。地極めよこあたへ給へ

ば掛戴く。此稚子か成長して、四天

王寺の額の文字。後代小野の道風と

響れを残す筆の道。地弘る佛法の道

廣き。姿は利劍の名號と拜まれ給ふ

無漏の海。浮世の海にさすらへの。

船路に出る篋。旅行跡に。わた

の原八十島かけて。こき出ぬご人に

は告よ。蟹小船。寄する渚の閻魔王

仕へかしづく多度六を。末世に小野

の篋が。冥途に通ふと云傳ふ謂は

斯ぞ有わたり。

高野山奥の院萬燈會の場

衆生の導引佛の方便誠を照らす萬燈

會佛方。流布の金剛力輝く萬燈明ら

けき高野の峰に月さへて法の教へぞ



壽し屋の段

切竹本津太夫  
鶴澤綱造

義經千本櫻

鮎屋の段  
道行初音の旅路の段

人形

娘お里 彌左衛門女房 吉田文五郎  
下男彌助 吉田文七郎  
親彌左衛門 吉田文玉七郎  
梶原平三景時 桐竹政龜造  
若葉の内侍 吉田扇太郎  
六代君 吉田文二郎  
いみみの權太 吉田文三郎  
女房小仙 吉田文米枝  
悴善太 吉田文米枝  
町取善太 吉田文米枝  
人卷太 吉田文米枝

淨瑠璃といへば千本櫻と謂はれる位世界的に知られてゐる名作で竹田出雲、三好松洛、並木千柳の三者合作の尤で全五段もの。

あの忠信の着付の源氏車の模様は初演に吉田文三郎が創案してつけたものでそのまゝを今に傳へてゐる繪畫美であります。

内容を記して見ますと、義經と御前の情話に平家の落人を骨子としたもので、義經の堀川御所へ川越太郎が兄頼朝の上使として三ヶ條の詰問がある、第一は鎌倉へ送つた平家

の大將知盛、維盛、敦盛の首級が何れも偽物なること、第二は鎌倉を亡ぼす院宣と共に初音の鼓を賜はりそれに頼朝を呪ふ聲ある事、第三は平時忠の息女卿の君を寵愛する事これ義経謀反の下心といふ。之に對して義経は立派に言ひ聞き且、卿の君も自害して義経の疑は晴れたが鎌倉方の軍勢と武藏坊辨慶は衝突して遂に兄弟不和となり義経主従は都を落ちます、平家の落人維盛は下市の釣瓶鮎彌左衛門の家に下郎彌助と名乗つてかくまはれてゐる。すしやの悴はいみみの權太といつて名うつてのならず者である。權太は母親に無心してはねつけられるので訴人して褒美の金にありつかんぞ代官所へさ駈け出しますあまへ若葉の内侍と六代君

が鮎屋へ尋ねて来て維盛さ久しい間の  
の對面をします。鮎屋の娘お里は彌  
助に深く想をかけてゐたが自分の戀  
を捨て、内侍親子を下市へ落してや  
ります。訴人によつて梶原は首受取  
りに來ますが彌左衛門は豫て主馬小  
金吾が追手を戦つて自害した首を身  
代りに立てると權太も改心して我妻  
子を内侍六代君の身代りに立てます  
あこで梶原が書いてゐつた品を改め  
ますと輪袈裟が出ますがこれは頼朝  
が維盛に出家得度せよとの美しい心  
情も見えて維盛は高野へ發足します

(床本) 毒し屋の段

M 立歸る歌三下り 春は來れども花  
咲かず、娘を漬けた鮎なれば、馴れ  
むよかろと買ひに來る。風味も吉野

下市に、賣弘めたる所の名物。釣瓶  
鮎屋の彌左衛門、留守の内に商賣  
に、抜目も内儀が早漬けり、娘お里  
が肩繼、稻に前垂ほやくと、愛に  
愛持つ鮎の鮎、押へてしめてなれさ  
する、味い盛り振袖が、釣瓶鮎と  
は物らし、締木に栓を打ち込んで  
桶片付けて申し母様 昨日さ、様の  
云はしやるには、翌の晩には内の彌  
助と祝言さす程に、世間暗れて女夫  
お歸りないは嘘かいな。オ、あの云  
やることはいの、何の嘘であらうぞ  
器量のよいを見込みに、熊野参りか  
ら連れて戻つて、氣も心も知る彌  
助と言ふ我名を譲り、主は彌左衛門  
と改めて、内の事任せて置しやるは  
そなたと娶す豫ての心、今日は俄に

役所から、親父殿を呼びに來て、思  
はぬひま入り、迎ひにやるにも人は  
無し。サイナア折悪う彌助殿も方々  
から鮎の誂 仕込みの桶がたるまい  
と、明桶さりにいかれました、もう  
戻らるゝでござんしよと、嚙牛へ明  
桶荷ひ、戻る男の取なりも、利口で  
伊達で、色も香も、知る人ぞ知る優  
男、娘も好いた厚鬢に、冠着せて  
も憎からず、内へ入る間も待兼ねて  
お里は嬉しく、アレ彌助様の戻らん  
した、詞まち兼ねた運かつた、もしや  
ごごへ寄つてか、氣が廻つた案  
じたさ、女房顔していふて見る、流  
石鮎屋の娘さて、早い馴れぞ見ゆに  
ける、母はにこく笑ひを呑み、詞  
彌助殿氣にかけて下さんな、此の吉  
野口の辨財天の教へによつて、夫を

神さまも佛さまも、頂いて居よさある天女の掟、そのかはり程格氣も深い、又ありやうは親の孫、瓜のつるにてはござらぬと云ひくろむれば、詞こればまアかへつて迷惑、段々お世話の上、大切なお娘御迄下され、お禮の申様もござりませぬ、去りながら兎角お前には彌助殿へお殿付をなされて、さりさては氣の毒、やつぱり彌助どうせい、かうせいとお心安うナ申し、イヤ／＼それは赦して下され。そりやなでござります。さればいの、彌助と云う名はこれまで連合の呼名、殿付せずにごうせい、かうせいとは、勿體なうて云ひ憎い、言ひ馴れた通り殿付さして下されと實に夫をば大切に、思ふ掟を幸ひに娘へ之を聞けがしの、母の慈悲こそ

聞えける、お里彌助は明桶を、板間に並べて居る所へ、此家の惣領いのみ権太、門口より乙聲で、詞母者人へ、云ひつゝ入ればお里は恠り、又兄様がようお出さもみ手する詞きよこ／＼しい其面なんぢや、よう来たが恠りか、わりや彌助も味ひ事して居るさうなが、コリヤ彌助もよう聞け、今追ひ出されて居ても寵の下の灰までおれがもの、今日は親父の毛虫が役所へいたと聞いたによつて、ちこそ母者人に云う事があつて来た。二人ながら奥へうせうと、睨み廻はされうぢ／＼と、これにさいふて立つ彌助、娘も後に引添ふて一間へこそは入にけれ。跡に母親溜息つき、詞コリヤ又留守を考へ無心に来たか、性懲もないわんげく者、其

おのれが心から嫁子があつても足踏一つさす事ならぬ、聞きや此村へ来てあるげなき、互に知らればすれ合ふても、嫁姑のあきめくら、眼つぶれさ人々に、云はれるが面白くない、へエ、不孝者めと目に角を、立かへつたる機嫌にぐんにやり、直ぐではいかぬといがみの權、思案しかへて詞申し母者人今晚参つたは、無心ではござりませぬ、お暇乞に参りました。ソリヤ何んで、私は遠い所へ参ります程に、親父様もお前にも、随分おめでとうと、しほれかければ母は驚き、詞遠い所とはそりやごへ、どうした譯で何にしに行くこと、根問ひば親の欺され小口、サアしてやつたさ、目をしば叩き、詞親の物は子の物と、お前へこそ無心申せ、

ついに人の物著片し、いひんだ事も  
いたしませぬに、不幸の罰か夜前私  
は、大盗人にあひました。サア其中  
に代官所へ上る、年貢銀三貫目と言  
ふ物盗に取られ、言譯なく、仕様も  
なく、お仕置にあふよりは、さ覺悟  
極めてをります。情ない目に合ひ  
ましたと、廣口袖をば顔にあてしや  
くり上げて出ぬ涙、鼻が邪覺して  
目の縁へ、さやかぬ舌ぞ恨めしき。  
甘い中にもわけて母親、實と思ひこ  
もに目をすり、詞鬼神に横道なしと  
年貢の銀を盗まれ死なうと覺悟はま  
た出かした、災難に合ふも親の罰、  
よう思ひ知れよ。アイ、思ひ知つ  
てはおりますけれど、何うせ死なれ  
ばなりますまい。コリヤヤイ、あい  
く。常のおのれが根性故、これも

かたりかしられ共、しやうぶ分けに  
と思ふた銀、親父殿に隠してやる、  
これでほつさり根性直せと、そろそ  
ろ戸棚へ子の影で、親も盗みをする  
母の、甘い掟さへ明け兼ねる、詞つ  
い鷹首でこちくがよござりますと  
仕馴れはる、おのて手業を教ふる不  
孝、親は我子が可愛さに、地獄の種  
の三貫目、後をくるめて持つて出で  
何ぞに包んでやりたいがさ、限りな  
いほど甘い親、うまいわろちやさい  
がみの桶、鮎の明桶よい入物、これ  
へくさ親子して、銀をつけたるこ  
がね鮎、蓋しめ栓しめサアよいは、  
これで目立ぬさげていれと、親子が  
工合の最中へ、苦い親父彌左衛門。  
これも疵持足の裏、あたふたとして  
門口を、戻つた明けいさうち叩く、

南無三親父さ内には轉倒、うろたへ  
廻り其桶を、こへくさ明桶と、  
さにも並らべて親子はひそく、奥  
さ口さへ引別れ、息を詰てぞ入にけ  
る。なせ明けぬくさ頻にたうけは  
奥より彌助、走り出て戸を明ける。  
内入悪しく邊を見廻し、詞コリヤ又  
どいつも寝てゐるか、云つけた鮎共  
は仕込んであるか、桶をさげた  
り明けたりぐわつたく、詞コリヤ  
思ふほど仕事が出来ぬ。女房やお里  
めはなにしているそ、イヤ只今奥へ  
呼びませうと行く彌助を引さめ、  
内外見廻し表をしめ、上座へ直し、  
手をつかへ、詞君の親御小松の内府  
重盛公の、御恩をうけたる某、何卒  
御子惟盛卿の御行衛をさ、思ふ折か  
ら熊野浦にて出合、御月代をすめ

此家へお供申たれ共、人目を憚かる  
 下部の奉公、餘りぞ申せば勿體なき  
 女房ばかりに仔細を語り、今宵祝言  
 ぞ申すも心は娘をお宮仕へ、彌助々々  
 々々賤しき我名をお譲り申したも、  
 彌助くると言ふ文字の縁起、人は知  
 らじぞ存ぜしに、今日鎌倉より梶原  
 平三景時來つて、惟盛卿を匿ひあり  
 ぞ、退引させぬ詮議、烏を鷲と云ひ  
 云けては歸れ共、邪智深い梶原、も  
 しや吟味にまゐるも知れずさ、心巧  
 みはいたして置けども、油断は怪我  
 のもさ、翌からでも我隠居上市村へ  
 お越あれさ、申上げば惟盛卿、詞父  
 重盛の厚恩を請たる者幾萬人、數限  
 りなき其の中に、おこそか様な者あ  
 らうか、昔はいかなる者なるぞ尋  
 れ給へば、詞私めは平家御代盛り

の折から、唐土硫黄山へ詞堂金お渡  
 しなざる、時、おんごの瀬戸にて三  
 千兩の金盗みさられ、役目の難儀切  
 腹には及げんさころ、有難いは重盛  
 様、日本の金唐土へ渡すこそ、日の  
 本の盜賊さ、御身の上を悔み給ひ、  
 重ねてなんの祟もなく、お暇を下さ  
 れ親里へ、立歸つて由緒ある鯨商賣  
 今日を安樂に暮せども、梓権太郎め  
 が盗み騙り、殺生の報ひぞさ、思ひ  
 知つたる身の懺悔、お恥しうござり  
 ますさ、語るにつけて惟盛も、榮華  
 の昔父の事、思ひ出され御膝に、落  
 る涙ぞ勞はしき、娘お里は今宵待つ  
 月の桂の殿もふけ、寢道具抱へて立  
 出れば、主ははつこ泣目を隠し、詞  
 コリヤ彌助、今言ひ聞かした通り、  
 上市村へ行く事を、必らずく忘れ

まいぞ、今宵はお里さ愛にゆるり、  
 か、おれさ離座敷、寢て花やろ  
 と蒲團敷く。惟盛卿はつくづくさ身  
 の上又は都の空、若葉の内侍や若君  
 の、事のみ思ひ出されて、心もすま  
 す氣も浮かず、打消れ給ひしを、思  
 はせぶりさお里は立ち寄り、詞コレ  
 イナこれな、オ、辛氣、何初心な穿  
 じてぞ、二世も三世もかための枕、  
 詞二つ並らべてこちやれさ、先へこ  
 ろりさ轉寢は、戀のわなさぞ見えに  
 けり。惟盛枕に寄添ひ給ひ、詞これ  
 までこそ假の情、夫婦さならば二世  
 の縁、結ぶにつらき一つの言辭、詞何  
 を隠さう某は、國に残せし妻子あり  
 貞女兩夫にまみえずの掟は、夫も同  
 じ事、二世のかためは赦してさ、流  
 石に小松の嫡子とて、解けた様でも

何處やらに親御の氣風残りける。神ならず佛ならねば夫ぞも、知らぬ道をば行迷ふ、若葉の内侍は若君を宿ある方に預け置き、手負の事も頼まんこ、思ひよる身も縁のはし、此家を見かけ戸を打叩き、詞一夜の宿ま乞ひ給へば、惟盛は好い退き機と表の方、叩く扉に聲をよせ、詞此内は鮪商賣、宿屋ではござらぬこ、愛想のないが愛想となり、詞イヤ申し稚きを連れた旅の女、是非に一夜を宣ふにぞ、斷り云うて歸さんと、戸を打開き月影に、見れば内侍と六代君、はつこ戸をさし内の様子、娘の手前もいぶかしく、そろく立寄り見たまへば、早くも結ぶ夢の體、表に内侍は不思議の思ひ、詞今のはどうやら我夫に、似たと思へどなりか

たち、つむりも青き下男、よもやと思ひ給ふ中、戸を押し開いて惟盛卿詞若葉の内侍か六代かこ、宣ふ聲にシエ、扱は我が夫、ま、様か、ノウ懐かしやと取組り、詞はなくて三人は、泣くより外の事ぞなかりき。先々内へご密に伴ひ、詞今宵は取わけ都の事、思ひくらし居たりしが、親子共に息災で不思議の對面、去りながら、某此家に居ることを、誰知らせしぞ殊にまた、遙々の旅の空供連れぬも心得ずと、尋ね給へば若葉の君、都でお別れ申してより、須磨や八島の軍を案じ、一門残らず討死と、聞く悲しさも嗟峨の奥、泣いてばつかり暮せしに、高野さやらんにおはするご云ふ者ある故に、小金吾召連れお行衛を、心さず道追手に

出合ひ、可愛や金吾は深手の別れ、頼みも力もない中に、廻り逢ふたは嬉しいが、三位中將惟盛様が、此お姿は何事ぞ、袖のない此羽織に、此つむりはと取付て、咽び絶入り給ふにぞ、面目なさに惟盛も、額に手をあて袖をあて、伏沈みてぞおはします、涙の内にも若葉の君、伏したる娘に目を付け給ひ、詞若い女中の癡入ばな、定めてお伽の人ならん、斯くゆるかきおくらしなら、都の事も思召し、風の便もあるべきに、打捨て給ふは胸愁と恨み給へば、詞ホ、夫と心にかゝりしがご、文の落ちる恐れあり、わけて此家の彌左衛門父重盛の恩報じと、我を助けてこれ迄に、重々厚き夫婦が情、何むな一禮返禮と、思ふ折柄娘の戀路、つれ

なく云は、過あらん、かへつて恩が仇なりと、假の契りは結べ共、女は嫉妬に大事も滅す。彌左衛門にも口留して、我身の上は明さず、仇な枕も親共へ、義理にこれまで契りしと、語り給へば伏したる娘、こたへ兼しか聲を上げて、わつと計りに泣出す。コハ何故と驚く内侍若君引連れ退んしたまへば、詞ノウコルお待ち下されと、涙と、もにお里はかけより、先づくこれへこ内侍若君上座へ直し、詞はお里と申して此家の娘、いたづら者憎い奴と、思召されん申譯、過つる春の頃、色めづらしい草中へ、繪にあるやうな殿御のお出、惟盛様とは露知らず、女の淺い心から、可愛らしい、いさしらしいと、思ひ染めたが戀のもの、

詞父も聞えず母親も、夢にもしらしてくださつたら、譬へこがれて死ねばとて、雲井に近き御方へ、鮎屋の娘も惚られうか、一生運添ふ殿御ぢやと、思ひ込んで居るものを、二世のかためは叶はぬ、親への義理に契つたとは、情ないお情に、あづかりましたとごうと伏し、身をふるはして泣きければ、惟盛卿に氣の毒の、内侍も道理の詫び涙、かほく間もなき折からに、村の役人かけ來り、戸を叩いて、詞コレへ、梶原様が見えまする、内掃除しておかれいと云ひ捨て立歸へる、人々はつと泣目も晴れ、いかはせんご俄の仰天、お里はさつそくに心付き、詞先づく親の隠居屋敷、上市村へと氣をあせる、實に其事は彌左衛門、我にも教

へ置きしむと、最早開かぬ平家の運命、檢使を引受け深く、腹かき切らんご身拵へ、内侍は悲しく。コレ此若の幼い氣盛りを思召し、一先づ愛をこ無理やりに、引立てたまへば惟盛も、子に引かざる、後髪、是非なく其場をおち給ふ、御運のほごぞ危ふけれ。様子を聞いたかいがみの權太、勝手口より躍り出で、詞お觸のあつた内侍六代、惟盛彌助めせしめてくれんご、尻引からげかけ出すをコレ待つてとお里は取付き、詞兄様これは一生の私が願ひ、見赦して下されと、頼めご聞かず勿飛し、大金になる大仕事、邪覺ひろくなご、するを蹴倒し張とばし、最前置きし銀の鉈桶、これ忘れてはご提げて、後を慕ふて追ふて行く、詞ノウと、

様か、様ご、お里が呼ぶ聲彌左衛門  
母もかけ出で何事と問へば娘は、こ  
れくく、詞都から惟盛様の御整  
若宮尋ねさまよひお出であり、積る  
咄しの其中へ詮議に来るご知らせを  
聞き、三人連れて上市へ落しました  
を情けない、兄様を聞いてゐて、討  
取るか生捕て、褒美にするごたつた  
今、追かけてさ云ふより悔り彌左衛  
門、ソレ一大事さたしなみの朱箱の  
脇差腰にぼつ込み、かけ出す向ふへ  
ハイくハイと矢筈の提灯梶原平三  
景時、家來數多に十手持たせ道を塞  
で、詞ヤア老耄め何處へ行く、逃げ  
やうさて逃さうかご、追取まかれて  
はつこ吃悔。先も氣遣ひ、爰も遁れ  
す七轉八倒心は早鐘、時に時つく如  
くなり、詞ヤア此奴横道者、おのれ

に今日惟盛が事詮議すれば存ぜぬ知  
らぬさ云ひ抜ける。其まりにして歸  
へせしは、思ひよらず踏込む爲、此  
家に惟盛かくまひある事、所の者よ  
り地頭へ訴へ、早速鎌倉へ早打、取  
ものも取あらず來れ共、油斷の体は  
おのれを取逃すまい爲、サア首討つ  
て渡すか、但し違背に及ぶか、返答  
せよませめつけられ、叶ぬ所と胸を  
すへ、詞成程一旦はかくまひないご  
は申したれ共、餘り御詮議強き故、  
隠しても隠されず、早先達て首討た  
り、御覽に入れんお通りと伴ひ入れ  
ば母娘、どうなる事と氣違ふ中、鮎  
桶提た彌左衛門、しづく出て向ふ  
に直し、詞三位惟盛の首、御受取り  
下されよと蓋をさらんごする所を、  
女房かけよりちやつと押、詞コレ親

父殿、この桶の中にはわしがちつと  
大事の物を入れておいた、こな様明  
けてどうするぞ、ホ我は知まい、此  
桶には最前惟盛卿のお首を入れ置い  
た。イヤく此桶にはあなたに見せ  
ぬ物があるさ、引寄すれば引戻し、  
詞おのれがなんにも知らぬ故。イヤ  
こなたが知らぬ故さ。妻は銀さ心得  
て争ひ果れば、梶原平三、詞扱はこ  
いつら言ひ合せ、縛れくれと下知  
の下、縛つたくと取巻所に、惟盛  
夫婦餓鬼め迄、いごみの權太が生捕  
つたり、討ち取つたりと呼はる聲、  
はつこばかりに彌左衛門、女房娘も  
氣は狂亂、いがみの權太はいかめし  
く、若君内侍を獨縛り、宙に引立て  
目通りに、ごつかご引すへ、詞親父  
の賣僧が三位惟盛を、熊野浦より連

歸り、道にて天窓をそりこぼち、青  
 二才にして彌助と名をかへ、此間は  
 ほてくろしき聲せんさく、生捕つて  
 面恥と存じたに、思ひの外手強い奴  
 村の者の手がかつて、漸と討取り、  
 首に致して持參御實檢と差出す、詞  
 才、成程剃毀ち彌助と云ふは存じな  
 から、先達て云はぬは彌左衛門に、  
 思ひ違ひをさそう爲、聞き及んだい  
 がみの權、悪者と聞いたむお上に對  
 しては忠義の者、出かしたく、内  
 侍六代生捕たな、ハテよい器量、夢  
 野の塵で思はずも、女鹿子鹿の手に  
 入るは天晴れ働き、褒美には親の  
 彌左衛門め命、赦してくれう。イ  
 ヤ／＼申し、親の命ぐらゐを赦して  
 貰うと思つて、此働きはいたしませ  
 ぬ。スリヤ親に命は取られても褒美

がほしいか、ハテあのわるの命はあ  
 のわるさ相對、私には兎角お銀と願  
 へば梶原、詞ハテ小氣味のよい奴、  
 褒美くれんぞ着せし羽織、脱いで渡  
 せば佛頂面、詞コリヤ／＼其羽織は  
 悉くも頼朝公のお召かへ、何時で  
 も鎌倉へ持ち來らば、金銀と釣替囃  
 託の合紋と、聞くより頂き出來た々  
 々、詞當世かたりが流行るによつて  
 二重取りをさせぬ分別、ようした物  
 と引替に、繩付き渡せば請取つて首  
 を器に納めさせ、詞コリヤ權太、彌  
 左衛門一家の奴等暫く汝に預くる。  
 お氣遣ひなされませぬ、貧乏ゆるぎ  
 もさせませぬテ。扱けなげな男めさ  
 譽そやし梶原平三 繩付引立てた  
 歸へる、詞ア、これ／＼其ついでに  
 褒美の銀忘れまいぞと、見送る隙間

油斷見合せ彌左衛門。にくさも憎し  
 と引だかへ、ぐつと突込恨みの刀、  
 うんこのつけに返返る、見るに親子  
 はハツはつと、憎いながらも悲しさ  
 の、母は思はず駈寄つて、天命知れ  
 や不幸の罪、思ひ知れやと云ひなが  
 ら、先だつものは涙にて、伏沈みて  
 ぞ泣居たる。彌左衛門齒がみをなし  
 詞泣くな女房、なにほへる、不便な  
 の可愛なのと云ふてこんな奴を生け  
 て置くは、世界の人の大きな難儀、  
 門端も踏すなと云ひつけて置いたに  
 内へ引入れ大事の／＼惟盛様を殺し  
 内儀様や若君を、よう鎌倉へ渡した  
 な、腹が立つて／＼涙がこぼれて胸  
 が裂ける、三千世界に子を殺す、親  
 と云ふのはおればかり、天晴れ手柄  
 な因果者に、よう爲居つたと拔身の

柄、碎るばかりに握り詰め、ゑぐり  
かけるも心は涙、いがみにいぢみし  
權太郎、又物押へて、詞コレ親父殿  
なんぢやい。此方の方で惟盛を助け  
る事は、叶はぬ。コリヤ云ふな  
今日幸ひと別れ道に傍の手負の死  
人、よい身替りご首討つて戻り、此  
中に隠し置き、コリヤこれを見居れ  
と、鮎桶取つて打明ければ、ぐわら  
りぞ出たる三貫目、詞シヤソ、こり  
や銀ぢや、こりやごうちやと呆れ果  
てたるばかりなり。手負は顔を打詠  
め、詞おいとしや親父様、私が根性  
が悪さに御相談の相手もなく、前髪  
の首を惣髪にして渡さうとは、了簡  
違ひのあふない所、梶原ほどの侍が  
彌助と云ふて青二才を男に仕立てあ  
る事を知らいで討手に來ませうか、

夫と云はぬはあつちも工み、惟盛様  
御夫婦の、路銀にせんと盗んだ銀、  
重い證據に取かへた鮎桶、明けて  
見たれば中には首、はつと思へば是  
も幸ひ、月代割つて突付たは矢張り  
お前の仕込みの首、ムウ其又根性で  
御臺若君に繩をかけ、何故鎌倉へ渡  
したぞ。ホ、其お二人と見えたのは  
此權太が女房悴、ヤアシテ、惟盛  
様御夫婦、若君は何國に、オ、逢は  
せませうと袖より出す、一文笛吹立  
つれば。折よしと惟盛卿、内侍は茶  
汲の姿となり、若君連れてかけつけ  
給ひ、詞彌左衛門夫婦の衆、權太郎  
へ一禮を、ヤア、手を負つたかと驚  
くも、お變りないかと恠りも、一度  
に興をぞさましける。母は悲しき手  
負に取付き、かほど正しき根性にて

人に疎まれ譏らるゝ、身持はなせに  
してくれた、常が常なら連合も、む  
ざと手疵も負はせまい、酷い事をさ  
せき上て、悔み歎けば權太郎、詞ヤ  
レ其悔み無用、常が常なら梶原  
が、身代り食ふては歸りませぬ、ま  
だそれさへも疑ふて、親の命を褒美  
にくれう、忝いと云ふとはや、詮議  
に詮議をかける所存、いぢみと見た  
ゆゑ油断して、一ばい食ふて歸りし  
は、禍も三年と、悪い性根の年の明  
け年、生れ付いて賭勝負に魂を奪  
はれ、今日もあなたを二十兩、かた  
り取つたる荷物の中に、恭々しき高  
位の繪姿、彌助が面に生うつし、合  
點がいかねと母人へ、銀の無心をさ  
りに入込み、忍んで聞けば惟盛卿、  
御身に迫る難儀の段々、此度性根改

めすば、いつ親人の御機嫌に、預る時節もあるまいと、打つてかへたる悪事の裏、惟盛様の首はあつても、内侍若君のかはりに立つる人もなく途方にくれし折からに、詞女房小せんが悴を連れ、親御の勘當、古主へ忠義、なにうるたへる事がある、わしと善太をこれかうと、手を廻すれば悴めも、かゝ様と一所にと、俱に廻して縛り繩、かけてもく手がはづれ、結んだ繩もしやら解け、いがんだおれが直な子を持つたは何の因果ちやと、思ふては泣き、しめては泣き、後手にした其時の、心は鬼でも蛇心でも、こたへ兼たる血の涙、可愛や不惑や女房も、わつと一聲其時に、血を吐きましたと語るにぞ、力味かへつて彌左衛門、詞エ、聞け

ぬぞよ權太郎、孫めに繩をかける時血を吐く程の悲しさを、常に持つてはなせくれぬ、廣い世界に嫁一人、孫さ云ふのもあいつ一人、詞子供が大勢遊んで居れば、親の顔を目印にがみのはした子があるか尋ねて見れば、コレ子供衆、權太が息子にほませぬかと、問へば子供はどの權太、家名は何と尋ねられ、おれが口からまんざらに、いがみの權とは得云はず、悪者の子ちや故に、はれ出されて居るであらうと、思ふ程猶そちが憎さ、今直る根性が半年前に直つたら、詞のうげ、親父殿、嫁女や、孫の顔見覚えて置うの。ナ、くおれもそればかりがこむせ返り、わつさばかり伏しづむ心を思ひやられたり。内侍は始終御涙、惟

盛卿は身にせまる、いこい思ひにかきくれ給ひ、詞彌左衛門が歎き去る事なれ共、逢ふて別れ逢はで死るも皆因縁、汝が討つて歸りたる首は主馬の小金吾とて、内侍が供せし譜代の家来、生きてつくせし忠義は薄く死んで身替る忠勤厚し、これも不思議の因縁と語り給へば、詞テモ扱てもそんならこれも鎌倉の、追手の奴等が皆しわざ、オ、云ふにや及ぶ、右大將頼朝が、威勢にはびこる無得心、一太刀恨みぬ残念と、怒りに交る御涙、實にお道理と彌左衛門、梶原が預けたる陣羽織を取出し、詞これに頼朝が着かへて、褒美の合紋に残し置きし、すたくに引裂ても御一門の數にはたられと、一裂づの御手向、サア遊ばせと差出す、詞

何頼朝が着むへこや、晋の豫讓が例  
を引き、衣を刺して一門の恨みを暗  
らさん思ひ知れど、御はかせに手  
かけて、羽織を取つて引上げ給へば  
裏に模様か歌の下の句、詞内や床し  
き、内ぞ床しきと、二つ並べて書た  
るは、アラ心得ず此歌は小町が詠歌  
雲の上はありし昔にかはられど、見  
し玉簾の内や床しきとありけるを、  
其返しとて人も知つたる此歌を、も  
のくしう書いたは不思議、殊に梶  
原は和歌に心を寄せし武士、内や床  
しきば此羽織の、縫目の内ぞ床しき  
と、襦袢付際切りほごき、見れば内  
には袷袢衣、珠數迄添へて入置いた  
は、詞コリヤとうちやコハいかにと  
呆れたる人々惟盛卿 ホウさもそう  
すさもあらん、保元平治の其の昔、

我父小松の重盛、池の禪尼と云ひ合  
せ、死罪に極まる頼朝を、命助けて  
伊東へ流入、其恩報じに惟盛を、助  
けて出家させよとの、鸚鵡がへしか  
恩返し、ハア、敵ながらも頼朝は  
天晴れの大将、見し玉簾の内よりも  
心の内の床しやと、衣を取てこれと  
ても、父重盛の御蔭と頂き給ふぞ道  
理なる、人々はつと悦び涙、惟盛卿  
もこれ迄は、佛を語つて輪廻を離れ  
ず、離るゝ時は今此時と、誓ふつ  
り切給へば、内侍若君お里はす  
り、俱に尼共妾かへ、宮仕へをゆる  
してご願へど叶はず、打拂ひく、  
内侍は高雄の文寛へ、六代が事頼ま  
れよ、お里は兄になりかばり、親へ  
孝行肝要と、立出で給へば彌左衛門  
詞 女中の供は年寄りの、役と諸共旅

用意手負を勞はる母親が、詞ノウコ  
レつれいな親父殿、權太郎も最後も  
近かし、死目にあふて下されと、止  
むるにせきあげ彌左衛門、詞現在血  
を分けた悴な手につけ、どう死目に  
あはれうぞ、死んだを見ては一足も  
あるかるゝ物かいの、息ある内は叶  
はぬ迄も、たすかる事もあらうか  
思ふがせめての力草、留るそなたが  
胸慾と、云ふて泣き出す爺親に、母  
は取わけ娘は猶、不慙くも惟盛の  
首には輪袷袢手に衣、手向の文の阿  
耨俱陀羅、三貌三菩提の門出、高雄  
高野へ引き別くる、夫婦の別れに親  
子の名残り、手負は見送る顔と顔、  
思ひはいづれ大和路や、芳野に残る  
名物に、惟盛彌助と云ふ鮎屋、今に  
さかふる花の里、其名も高くはら

道行初音の旅路

忠 靜

御

信 前

竹本 綴太夫  
竹本 文字太夫  
竹本 鏡太夫  
竹本 陸路太夫  
竹本 町太夫  
豊澤 新左衛門  
野澤 勝平  
鶴澤 芳之助  
鶴澤 寛市  
鶴澤 友作  
竹澤 團二  
豊澤 新太郎

狐 靜

忠 御

信 前

桐竹 紋十郎  
吉田 玉松

人形

せり。

(床本) 道行初の音旅路の段

前段鮓屋の次即ち千本櫻の四段目に  
なつてゐます。内容は都落ちをした  
義經の後を慕つて靜御前は佐藤忠信  
を一人伴につれて吉野山御殿へ急  
ぎます。御殿には既に實の忠信が居  
て靜のお供は靜の所持する初音の鼓  
の音に戀かれてついて來た狐であつ  
たのです。義經も不惑に思ひ親狐の  
皮で張つた初音の鼓を與へ源九郎と  
命名してやります。この淨瑠璃の床  
本を記しますと、

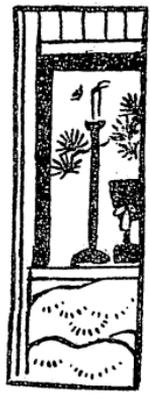
くらぬなりもよしつれの御行未はな  
にはづのなみにゆられて、たよりひ  
て今はよしのさ人づてのうはさを道  
のしほりにく大和路さしてしたもゆ  
く。見はたせばよもの梢もほころび  
て梅がへうたふうたひめのささの男  
が聲々にわがつまがてんじやうぬけ  
てすえるぜん、ひるのまくらはずが  
ひるのまくらはずがもなやチ、つが  
もなや、おかしからすの一ふしに人  
も、わらやのそだちにも春ははれつ  
くてまり、ひいふうつくづくさきけ  
ばこち風音そへて、こそこの氷を徳若  
にごまんさいさ君もさかへまします  
あいけふありやたのもしやさぞなや  
まさのひならば御かくれがをいざ問  
はん、はれも初音の此つゞみ君のさ

M 戀と忠義はいづれが重い、かけ  
て思ひはばかりなや忠さまこそこの武  
士に君が情さあづけられしづかに忍  
ぶ都をば後に見捨て、たびだちてつ

かへを壽きて、むかしを今になすよ  
しもかな。たにのうぐひすもはつれ  
のつやみんくしらべあやなす音につ  
れてまねくさおくればせなる忠信が  
旅すむた、せなに風呂敷をしかさせ  
たらおふて野みち、あぜみちゆらり  
くかるい取なりいそいそと、めだ  
くぬ様に道へだて女中の足さあなご  
つて嘸お待かれ、こゝ幸ひの人目な  
しさせいめいそへて賜はりし御きせ  
なむを取出し、きみを敬ひ奉る静  
はつやみを御顔とよそへて上におき  
の石、人こそ知らぬ西國へ御けこう  
の御かいしよう、浪風あらく御船を  
住吉浦に吹上られ夫よりよしのにま  
します由、やがてぞ参り候はんさた  
がひにかたみをさりおさめ鷹さつば  
めはどちらが可愛やゝを育つるつば

めが可愛い、花を見するかりがね  
ならば、ふみの便りも又の縁エ、そ  
ふじやいなくうたふ聲々面白や實  
に此鎧を賜はりしも兄次信が忠勤也  
誠にそれよ越方の思ひぞ出る檀の浦  
の海に兵船平家の赤旗陸に白旗源氏  
の强者アラ物々しやこ夕日影に長刀  
を引そばめ何某は平家の侍悪七兵衛  
景清と名乗かけくなき立てくな  
ぎ立つれば花にあらしのちりくば  
つと木の葉武者言いかひなし出や旁  
々々三尾の谷の四郎是にありさ渚に  
丁ぞ打つてかゝる刀を拂ふ長刀のふ  
ならぬ振舞何れ共勝り劣りも波の音  
打合太刀の鏗元より折て引沙歸るか  
り、勝負の花を見捨つるかさ長刀小  
脇にかい込で兜のしころを引摺み後  
へ引くあしよろくく向ふへ行足

たちんぐん、むんづさしころを引切  
て双方尻居にごつかさ座す腕の強さ  
ま言いければ首の骨こそ強けれさハ  
ハ、ハ、ハ、ハ、笑ひし後は入亂れ手  
しげきはたらき兄次信君の御馬の矢  
表に駒をかけすへ立ふさがるオ、聞  
及ぶ其時に平家の方には名高き強弓  
能登の守籠經と名乗もあへず、よつ  
びいて放つ矢さききはうらめしや兄次  
信が胸板にたまりもあへず眞逆様あ  
へなき最期は武士の忠臣義士の名を  
残す思ひ出るも涙にて袖はかほかぬ  
つゝ井筒いつか御身ものびやかに春  
の柳生の糸ながく枝をつらぬる御ち  
ぎりなごかばくちしかるべきさたが  
ひにいさめいさめられ急ぐとすれど  
はかどらぬ芦原峠けうのささこ、つち  
だしたども遠からぬのちの春風吹は  
らひくもさ見まがふ三芳野の麓の里  
にぞつきにける。



### 大文字屋の段

中 竹本相生太夫  
 鶴澤重造  
 切 竹本土佐太夫  
 野澤吉兵衛

### 人形

大文字屋榮三郎 桐竹紋太郎  
 娘 おまつ 吉田文五郎  
 手代 忠兵衛 吉田玉徳  
 下女 おたま 桐竹紋司  
 榮三郎の母 吉田玉七  
 萬屋 助右衛門 吉田小兵吉  
 手代 傳九郎 吉田玉松  
 手代 權八 吉田榮三

### 紙子仕立兩面鑑

### 大文字屋の段

この淨瑠璃は明和五年十二月北堀江座に初演された菅專助の作で上中下三巻八段からなつてゐて、この大文字屋は中巻の切になつてゐます。此の段の内容をお知らせいたします。大阪上町での大店萬屋の粹助六は大文字屋からお松さいふ貞節な嫁を迎へたにも拘はらず新町の遊女揚巻と深く契を交はします、其處へ附込んで、お松に戀慕してゐる番頭傳九郎の陰謀によつて新清水の浮無瀬で親助右衛門から紙衣一枚で勘當され丹波路へ駈落する。お松は實家の大文字屋へ歸つて居

たが日夜夫の安否を氣遣つて居るが、お松の兄の榮三郎も律義者で妹に身を賣つて揚巻身請けの金子調達を勤めるので、お松も夫のため喜んで承知する。この一部始終を聞いた親の助右衛門は兩人の誠を感じ揚巻の身代金を出して其年季證文を持って大文字屋を訪れる。さいふ親の慈悲妻の貞節、義理人情に絡む絶品です。

### (床本) 大文字屋の段 (中)

高臺の御制の詞ゆきいなく籠賑ふ涙花津や寄り來る人も大阪は實日本ノ臺所、諸色諸間屋立つやく中に取わけ本町筋、家柄古く身上は左前でもしむ隠す河内木綿の長暖簾、萬屋の助六が女房の里ご格式も大文字屋榮

三郎、男一疋和らかな綿商賣の店先に汗水たらし仲仕共、咄しまじりにこて／＼と、つくる江戸荷のしめ括り、片手に印書墨の眞黒になる七つ前、仕廻仕事ぞせはしなき、帳箱には手代の權八、番頭顔の鼻高々、煙管ひねくりまわり聲、ア、コリヤ／＼／＼口やかましい世間咄し、置てもらふ、口が動けば手おやまる、仇口ばかり仰山でねつから仕事のかい行かぬはい、僅七駄の荷造りに二人三人が一日仕事、それではさんさ、勘定にかゝるものぢやないさ、わめきちらせざいづもの事さ、耳にまかけず仲仕共、ヤコレ申權八様、またしてもせか／＼／＼さんば其様にせかしやつてもな、手は二本はかないによつて、二人前は働けませ

ぬはいな、お前さんもまた日がな一日其様に内で修羅くらにやせすさ、ちつと神まるりか、また何處その淨瑠璃でも聞きにいかしやれませぬかい、エ、それを責様にならばふかい在の買まはしから諸國のかげ引おれが胸の算盤一つで一桁違ふても内は暗闇身上の狂言に追立てられて芝居所かい、よい仇口を叩かずに、仕事仕舞たらいんだ／＼ハイ／＼／＼イヤモ番頭様のきまりがよいので、お影でだん／＼荷のでる口が少なふなつたばい、ハ、ハ、これでは出入方も胸の算盤の桁が違ふ、二進が三進も行にくい早ふ仕舞でまん直しに五か／＼の顔なま見よま仕事片付け掃出して、挨拶そこ／＼立歸る、エ、頃の過ぎたならすめらさ、ぶつ、

く後ろの腰籠を上げ立出る榮三が母イヤノウ權八、さつきにから音かせぬが榮三はまだ戻らずか言ふに權八、しかつめ顔ハイ朝めしの箸下に置くご馳け出した旦那殿、大かた九郎右衛門町か島の内へ、見山屋でかなござりませぬぞい、イヤモ近年田舎の不景氣の掛損の仕つづけ。モ氣もせやくは此番頭ばかり、其上諸式は皆高値極つた上にもきまられば仲々いけぬこちの身代じやにアノ旦那の／＼くらには此白鼠もヤモほつこまつたさ、主の影口憎て口我はがほするつらにくさ、むつさはすれご色にも出さず、チ、權八のすけ／＼さいかに心安いさて、主の影口はよふないもの、常に實体な榮三郎、何のそんな所へ行やらふぞ、噂を聞け

ば此間 清水でのやつさもつき、舞  
 の助六殿は親御の勘當さの事、ア、  
 よくくの事で有ふがそれに付ては  
 娘のお松、嘸や便りなからふさ榮三  
 もわしもさつ置つモ夜の目も合はぬ  
 もの案じ、大かた舞殿の訛言せふさ  
 萬屋の同行衆へ談合にかな、いたの  
 で有ふぞいの、ハテそれはいらぬ氣  
 もせてござりますはい、モ大事の娘  
 御の舞様ちやが申しおかみ様の前で  
 はちこ言憎い事じやけれど、此まあ  
 廣い大阪に最一人さない大たわけ、  
 ア、いさしほなげにアノ美しいお松  
 様を七里けんばいけり飛し揚卷さ  
 ふアノマア古狐にだんまされけふも  
 あげ、あすもあげさ毎日々々揚詰に  
 豆腐のあげてもアノ様に買ふてはイ  
 ヤモさんさたまるものじやござりま

せぬ、揚句のはてにはふんづまり、  
 マ、有ふ事が有まい事が萬屋の若旦那  
 那さも、言はれる身でかたりをした  
 の、イヤ賃金を遣ふたの、さやばな  
 事の有條それからおこつての久離沙  
 汰それでもまだ仕たらいでさふく  
 揚卷を引揚て歩賃借りのまゝの稽古  
 でコレマ高歩蹴さ出かけたはいナハ  
 ー、イヤア〜そりやマアほんの事  
 かいの〜イヤモほんの事かいの  
 所かいなハ、何も全盛の太  
 夫の事なり、新町の親方から關破り  
 さ願ふ故、代官所からも嚴しいお手  
 當ごふで追付青細引チ、こは〜  
 ンチ、恐ろしやのホー、モ咄し  
 するさへぞつとすると尾緒を添しわ  
 んさん口、聞く妙三は氣遣ひさ老の  
 習ひの目にもろき涙のしづくゝる珠

數の玉も數添ふばかりなり、何ぞ肝  
 が潰れませふかな、チ、其答々々ヤ、  
 お道理でござります〜はい、私も  
 聞いた時はモ腹が立て〜餘り腹が  
 立過ぎて悲しいやら又おかしいやら  
 おかし悲しいおかししいおかし涙  
 がはら〜ハ、チ、私さし  
 た事が餘り咄しに身が入てお前様ま  
 でを泣しましたはいなアシタガシよ  
 ぶお聞きなされませやそんな大それ  
 た科人の助六殿故、親御の勘當はコ  
 リヤ尤じやと思はれます、それに  
 付てお松様をアノ萬屋の内に〜ん  
 ン〜置たらごんな雜儀がかゝらふ  
 やら知れませぬぞへ高む嫌ふて置き  
 ざり所然にしられたお松様ハテモ男  
 日照は有まいし、ちつとも早ふ呼戻  
 して又ほかに相應なよい談合も有り

そふなもの、マ、いよふ御思案なき  
れませさお爲ごかしのをしり口、聳  
のわらから焚付る、硫黄の鼻の先智  
惠は修羅を燃さす工みかや、ささき  
妙三權八が詞のはし、何さやら合  
點行すご手を打ふりチ、權八の何い  
やるぞいの、警聳殿はごふ有ふご一  
つ且嫁らしたれば萬屋の娘あちから  
戻されたら是非もなし、難儀がいや  
さに取戻す様な、さもしい心はない  
はいのハテモ聳殿がござらすば舅は  
親、助六殿のかはりに傍に居て孝行  
にするが嫁の道假令他人が聞かによ  
こそ人中でそんな事言出して大文字  
屋の恥ふれまふて下さるかご、恥し  
められて佛頂面テモ扱も堅いはく  
エ、マ年寄の片意地と鐵橋のいがん  
だのは、ごふでも焼かによマ直らぬ

かいな、爲になる事いふがいやなら  
ごふなご御勝手になされませハレヤ  
レ、く、く、しゆんだ咄しで氣がつま  
つたドリヤ臺所へいて暖燭でばい一  
引かけよふご禮儀をしらぬのはふす  
者、つぶやき勝手へ入りにけり、後  
には一人母妙三聳と娘の身の上を案  
じ重なる憂思ひ西の辻から聞しげに  
此家の主榮三郎心の屈托顔色に出さ  
ぬは百倍氣苦勞の胸を押へて立歸る  
母は見るよりチ一榮三戻りやつたか  
朝早ふ出て今頃まで何處に何してひ  
もじかる、ごいふを押へてアイエ  
く書飯は得意先で呼れました、ヤ  
それはそふご母者人、ごこへいても  
聳の噂、ア、ひよんな事に成ました  
はい、さいのふ今も今さて權八が聳  
殿のしなす咄し、聞けば聞く程氣の

もめる事ばかり、マアごふしたらよ  
からふご、そなたの戻りを待兼まし  
た、チ、お道理でござりますく、  
シタが申し母者人、愛をよふ御合點  
なされませ、助六は勘當なれば相手  
のない妹、助右衛門殿が戻したふて  
も、サ何やかやの義理を思ひ遠慮の  
場合も有りそふなもの、そこを汲み  
取らぬはこつちの不粹、何んご、妹  
を取戻ふじやござりますまいか、ご  
律義な常の氣質とはそぐはぬ詞の先  
折て、ア、コレ榮三、そなた迄がそ  
りや何事、マよふものを思ふても見  
や、たつた一人の子に別れ力ない舅  
御、殊に近頃はきつい弱り、せめて  
寢所の上げおろし介抱さすが一つ家  
のよし、アイヤ、くそりや悪い御  
了簡、大金持の萬屋、一人息子が身

を打つ女郎、請出してもやりたいけれど、義理有る中から貰ふか嫁がせになつてそうもならず。所で助六を追出したら嫁の方から逝るは定、そこで大夫を請出して、助六を呼戻す思案のそこ見た目は違はぬ、又助六は猶以てうるさがる妹、何も其様に親子さもみないものくふ様にして貰はいても、大事ないじやござりませぬか、ハテモ十人並には勝れたお松、取返して何處へなさ、イヤコレ／＼榮三そなたはマアおかしい氣を廻す人じや、助右衛門殿に限りそんなむごい人じやない、フゝゝゝそれはお前の正直一廻さいふものモ此様にもちや付出すさ、常懇にした仲でも、むごい氣の出るが世間の有様、ナ申し、ごふで有ふさお松

はこつちへア、榮三聞きとむない、まだいやるはいの、助六殿は勤當でもお松と夫婦の縁は切れぬ、女房の方から隙取さは、そりや大法に背いた事、それまでもない、二人三人男を持たして可愛い娘を疵者にはチ、此母が得すまいエ、マアほらしいこいつにない母の腹立ぐはつたびし道具に當り中の間の襖押明け入にけり

(床本) 大文字屋の殿 (切)

既に日もくれ飯焚が燈す勝手の方、に十方失ふ氣はくらやみ、心にもないわんざんを、いふも榮三が算盤の柁をはづれて門口の大戸おろせど落付かぬ胸の算用さつ置つ思案の中戸に人音して萬屋の手代忠兵衛、上り口に手をつかへお袋様榮三様へも助

右衛門申します、ちと御相談の事に追付けそれへ、マア嫁をさきへ遣はします、委細はお目にかゝつて申上げませふさいふ中門へ提灯のかけも心もかきくもるお松さいへご色かはる、顔は辛苦におも瘦せて、敷居も高き兄の内、供のでつちや腰元も、氣の毒そふにしよげ／＼と猫に追はれた忠兵衛は榮三が返事お松にも挨拶そこ／＼供の者、皆打連て歸りける、妹はしほ／＼兄の傍のものも得言はず衿に顔、榮三は奥口見廻してア、此間は定めていかい氣あつかひ、それがかきつう色も悪い、推量して下さんせ、世界に運の悪い者は私斗りのやうに思はれて手も力もござんせぬチ、そふ有／＼何かの様子聞いた故今夜は是非共おれむむかひに行

く所、よふ戻つてたもつたのみ、何  
のよふ歸りましよ内にも寝ぬ殿御で  
も、大事にするが女房の役と、心一  
げい氣を付ても、氣に入ぬば私が誤  
りついに、小やさしう氣の落付た  
事もない夫婦中でも萬屋の内から葬  
禮しられいさか、様のおしへを守り  
辛抱したかでもない、夫の勤當其上  
に關破りのお尋者ご聞て今朝から湯  
水さへ、咽を通らぬ癩の痛み、舅御  
は最前もア、よい時に勤當した、關  
破りをせふが首の座へ直らふが親へ  
難儀はかゝらぬ祝ひ事に酒一つと立  
派にはおつしやれご目には一げい涙  
を持たしたか、んしてつぐ酒をお  
請けなされた。盃もふるふてこぼれ  
る酒よりも膝をぬらすは舅と嫁の、  
涙は堪忍せぬものさ、むせ返りたる

くごき泣榮三も俱に目をこすり現在  
の兄が氣にさへ感じ入つたそなたの  
貞節、助右衛門殿の心根を推量した  
故も今も今こそ母者人に思ひもせぬ  
廻り根性所へかふ戻つて来たば、お  
れが存念の届いた印、コレわがみの  
其直な心を見すへておれが一つの無  
心が有がなんご聞てくれる氣か、チ  
マ改つた事おつしやります兄弟  
中に何の遠慮、もごんな事でも聞い  
てたもるか、アイ、そしたら新町へ  
いて、く勤をしてたも、エーチー  
悔りする筈じやく、二張の弓はひ  
かぬさ女の道を立るそち、何ご勤  
しられふぞ、おそこを破つて勤をす  
るが、やつぱり夫助六へ心中、つら  
い勤めするを心中さへ、さればい  
の、勤當しられてうるたへ廻るはし

よ事がないご諦めても濟せど、揚卷  
を連れて、退た助六關破りさいへば料  
人どのやうな憂目にあはふやらサ其  
料を助ふご思へば、揚卷が身の代を  
親方へ立てさへすれば、御上体は願  
おろしてモ何のふしなう事は治る、  
さいふて其身の代がばした金で出来  
る事じやない、しりやる通り近年は  
不手廻しなこちの身上モ中々才覺及  
びもない事、いかぬからの思ひつき  
昨日揚卷が親方、扇屋に直談して義  
理合の内證萬端打明てモ近頃無理な  
事なれども妹のお松をかばりに取て  
申しおろしてくだされさ、だんぐく  
さ、歎いたればア、了簡のよい親方  
よし揚卷が戻つてももふ疵のついた  
太夫、ほかに身受けの客も變改、麻  
の勤めはもさよりさ、れす、しかへ

に出しても虫付きと思ふやうに金にはならぬ、器量よしと聞及んだ萬屋の嫁御、ハテ得心づくで勤める氣なら、ヤコリや一番して見物じや、聞き分けたと、約束はかためて置たがコレおかしい所をりきむ兄と思はぶが、爰をよふ聞てたも、先の萬屋助右衛門殿はそなたやおれが實の伯父貴、其後繼に手代を引上げナア、アレ今の助右衛門殿、家の甥と念頃にぎちかばするこちの身代モ肩を入れて今日まで世話して下さる深切さ其息子の助六が難儀を餘所に見て居たらア、血を分た從弟ならだまつても居まい表向は伯父の從弟のさいふても血筋でない放れ際、どうよくな捨て置けとサ思ふやうな助右衛門殿ではなけれ共、世間の口より此榮三が胸

がどふも濟にくい、サ爰の所を辨へて、廊へいても勤てたも、きのふけふまで萬屋の花嫁御と、人に人を連た身が日傘をさしかけ、人中の道中、そなたの面目ないよりもおれが外い聞えぶがいなさ、人に指ざし笑はれるもコレ義理と金に恥を捨る心を思ひやつてたも、母の手まへを憚る涙、聲をも立す男泣お松も涙の顔ふり上げ、アイくくくくもふくくく、何にも申しませぬ、よふ勤めさしてくださんす、兄様嬉しい忝い、ア、是を思へば清水で夫の勘當ゆり次第、退ふさいふて揚巻殿證據にもらふたコレ此櫛、助六様も手を切る印と守り袋の七枚起請、今さら義理の言い過し、取返されぬま合點して大阪放れ添ふ様に連てか

け落さしやんしても、世間もせまくイみのならぬ時には突詰た日頃の律義一筋に、もしひよんな心でも、出よかと思やわしや、身もよもあらられぬ、嬉しや勘當赦たらば心置ない女夫じやと楽しんだの夢現さてもわたしは世の中の女の數にも入られぬ身が、夫の爲にする勤め、恥しいも、無念な共、口惜いとも思はぬが舅御や、かゝ様や、お前の心を思ひやり、それが悲しいくさ、くどき歎くぞいぢらしき、不便と思へど氣を取り直し母者人の手前は一寸遮れ世間へ顔が出されぬ、そなたは京の懇中へかけ落した分にせふ、サア早ふ新町へ連れていきたい、そんならわたしや書置を、ア、イヤもふそれには及ばぬ事、榮三出かした。

お松よふ新町へいてたもるのふ、母  
者人お前さつきにからの様子をチ、  
暖簾の内に立聞して泣いてばつかり  
居たわいの、四百四病の病より貧ほ  
ご衛ないものはない、貞女は兩夫に  
まみへすこ、女大學傍に置いて朝夕お  
しへた母親が、夜毎〜に越路の客  
や、筑紫の人に添寝する、勤をよふ  
する出かしたと響るは何の報ひぞこ  
ごぶご身を投げむせかへればア、コ  
レイナか、様〜其やうにむつ  
かつて持病おこして下さんすなへ、  
わたしや何にもかもよふ合點して居  
るさかい一つも悲しい事はないナ、  
ない〜、ない〜、さいふ後聲  
もしやくり泣チ、道理御尤、道理じ  
や〜御尤じや〜、  
ほんに浮世の義理あいほごサイノ、

人を泣かすものはないわいのと三人  
顔を見合はして手に手を取り組み、  
泣く涙、落漣津瀬に春雨の猶ふりか  
ゝる如くなり、まだ暮過ぎと熾燭の  
しまつに闇も苦にならぬ、きんか頭  
の助右衛門、くりり戸ぐはら〜咳  
ばらひ、すつこ入り來る姿を見て、  
親子は泣胎押しぬぐひ、チ、お出な  
されませ、エ、まだお見舞も申しま  
せぬが、ア、たんさお心づかひ、な  
んの〜一家中から譲りうけた萬屋  
の家督棒に振かける助六め、まくり  
出して仕廻ふたりやさつぱりさ夜か  
寝よいが、ア可愛いは此お松、悪性  
な男を引つか、へ身への心づかひ、  
大阪中の嫁さいふ嫁に煎じても呑し  
たい、器量さいひ、まだ廿にもなら  
ぬ者を、べん〜と留て置は、大き  
な殺生、今夜切りに縁切つて戻しま  
す、定めて不足も有るけれど、か、  
り子を捨る様不仕合せな助右衛門  
何事も了簡して下され、ヤ、ナニ嫁  
ア、いやもふ嫁ではないお松女郎、  
何でも用があるなら遠慮せず手紙  
でもはなれて居てもおれが氣は、や  
つぱりかばる事はないと、いふもほ  
ろりさ涙聲、母親はすり寄つて、平  
生お世話に成てゐる榮三郎、不足と  
は勿体ないが、たつた一つ聞入ませ  
ぬは助右衛門様、助六殿は一人子の  
事、大金持のこな様、揚巻さやらを  
受け出して、ハテ妾めかけは有るな  
らひ、手元へ取寄せて置たらば、廓  
通ひも忽ち止み、マ此やうにやかま  
しう悪い愛名も立の道理、ア、コ、  
コレかみ様〜エそれや大まか

なりな、了簡じやわいの、譲り請けた身代でも。盗み出してつかいおるはしよ事なけれど、親の手から傾城受出す金出しては先助右衛門殿へ言譯がござらぬはいの、又あかの他人のおれを伯父／＼と義理を立、けつこう捌くこなた衆へもみす／＼妾を傍に置いてコレ此顔が合はされませふか／＼其上のらめを勘當した後で吟味すれば備後の殿様から拜領した東倫の三幅對、箱ばかりで、中は明から、折わるふ殿様も近々にお登りお手馴の掛物久しぶりに見やうなご、御意が出まいものでもない、もしそふなつたらやくたいこくたいがこりや息子めをそゝのかした傳九郎めが所爲さ思ひ、親受人へ吟味にやつたりや、傳九郎めは其夜から行方

が知れぬと言ふ隙やつて仕廻た奉公人、親受人もれだられず、難儀の元は皆息子め、彌勘當の錠前をおるさればならぬ様になつたも此お松が不仕合はせおりや諦めて涙も出ぬが、嗚、こなた衆のさ後言いさし、顔を背けてたぐり咳榮三も涙吞込んで、ア、段々さお氣のもめる事ばかり、ア、いや／＼何事も思ひ流して勞の出ぬ様になされませ、申、オ妹は造りに受取ました、サア相手のない若い嫁を逝しもせず傍に置ばア、あの親父め合點がいかぬわいのと、近所となりに思はるゝもいやさに氣の毒ながら剪去り、ヤ書て來た去り状と、渡せば手に取泣入嫁、おしひらいてふしん顔兄様わたしは讀むわあじいな文章ドレ／＼ヤアこりや揚巻が年

季證文ア、マー、雇相いふまい、そりや去り状／＼／＼じや、トハまたどふしてチーどふしてはそつちの胸に覺が有ふ今朝からぶらん／＼こちの内を見入れて門先をあちこちとするは道具會で近付になつた新町の扇屋、ハテ合點が行かぬと、隣の見世の片たかけへよび込で追かけくばして様子を問ば揚巻が代に妹を賣て助六が關やぶりの科を助けてやりたいと、涙を流して、榮三殿が段々の頼み故嫁御の器量を見に來たさ、モー一が始終を委しい咄、從弟さいふは名斗りで、根は他人の忤めを、マそれ程にまで思ふてくださる深切、何と嫁が賣されふ／＼揚巻が身請するにこそ血筋は引かれど姪さ名の付くお松が身受けモ千兩萬兩投げ出して草葉

のかげの先助右衛門殿がよもや腹も  
しんぢられまいぞ、買て取た其體文、モ  
眞實誓文こりや悴めが可愛じやない  
ぞや、こなた衆親子三人の志が、  
モあんまりく添けさ、氣休めにさ  
氣休めにさあられぬ去り狀まんざら  
悪玉みはせぬ助六め、追付け身の明  
りも立ち、首尾よふ内へ戻つた時、  
又改めた嫁入の式金は、其去り狀マ  
どれ程義理を知らぬ悴めでも此様子  
を聞たらば、心も折れて夫婦中、睦  
じうなり、そなもの、何ぞそふでは  
あるまいか、色も香もある、梅干  
親父辛ふ見へてもすいなりけり、親  
子三人手を合し涙一時にわつと  
泣聲耳に手を當てアレ又泣しやるは  
いのくくア、もふくくく

ましよと門の口さつかは出るもゆつ  
くりと、泣に逝るさ哀れなり、母親  
は氣を付て是ははしたり、くちからふ  
ソレ榮三提燈を、ハイちよつと送つ  
て參りましよと、手早に燈す小提燈  
追付行ば母親も、娘も少々落付いた  
胸をさすつて奥の間へ襖押明け入り  
にける、往來も暫しさだへしと四方  
に人音かすかなる、折を見合はす格  
子先妙法蓮華經申すも愚かや祖師日  
蓮大菩薩、龍の口にて太刀の下に直  
り賜ひ又或る時は佐渡が島に流され  
賜ひ、難行苦行なされしも、彼一物  
をせしめんための御誓願なり、なむ  
妙りんはなけれざさへ渡る法華の題  
號相圖と見へ内よりくやりそつと明  
け傳九郎きたか、權八首尾はまぶじ  
やく世話なしに娘は戻つた、助六

が来て居ると一ぱいくばして爰へ出  
そ、われも身振りを助六で物さへい  
はれば知れぬが暗り、くはへて退て  
腹存分樂しんだ胸からは約束の通り  
京へ賣其金は權八にアコリヤ大きな  
聲すなやい、そのさころにぬかり  
はないわい、がいやな事は金七が、  
此中の晩から行衛が知れぬ、ひよつ  
と隆助が助六に捕らまへられたら大  
きなぼく、モウおれも大阪に体は置  
かれぬ、チ、そりやうつかりとして  
居られぬが、マア何であらふと娘は  
おこそ、油斷せぬやう駒寄のかけに  
隠れて待て居い、見付られなと手先  
で知らせ、内へそうく隔の襖差覗  
いて聲ひそめお松様くちよつと  
くさ小手招き何心なく出てくるを  
傍につれて小聲になり、コレコレナ

きてじやぞへへ〜ヤきてじやと誰  
 かいの、サア今表から權八〜と叫  
 だは誰れと出て見たれば助六様じや  
 わいな、ヤアそれは、ハテ聲も高い  
 はいな〜〜〜ア〜アおいとし  
 ばや身すばらしい紙子がけ、涙でつ  
 きては〜なれ〜畜生の様な揚巻め  
 おれが乾皮になつたを見捨、まいて  
 仕廻て後白波、モそれから獨ぼう  
 し 犬に追れて一夜さは稻荷の森で  
 寝たはいのふ、チ〜悲しがる〜マ  
 悲〜なふて何させふぞいの其眞實な  
 女房を嫌ふた罰でひだるいめ、アノ  
 急になんなりと喰してくれ、ガマア  
 お松にちやつと逢たい、逢してたも  
 さおろ〜聲、アお馴染なり、ゆう  
 ふくに育つたお方が一亂のやうな形  
 を見てあつい涙が〜さいひつ〜顔

に袖屏風唾の涙で取かくればお松は  
 誠と、そりやマアごこにエ早ふ逢た  
 い呼ましてア〜イヤ〜〜まだ家  
 内が寝もせぬ中めしたきや、でつち  
 めに見付られては爲にならぬ、コレ  
 駒寄のかけにかじんでじや、ちよつ  
 とあふて連くおはいり、わしや其間  
 に内の首尾灯もくらふして置きます  
 と、言様八方する〜〜おろして  
 ころがい庭の隅、隠せば傍薄暗り  
 お松が思ひ山鳥のおろの鏡の夫した  
 ふ、身はわな〜さく〜り戸を、漸  
 々明て軒の下助六様〜ごこにじや  
 いなアア、おいとしや現在女房の親  
 の内へ、よふ道入りもせず隠れか  
 んで、チ〜マ此形は何事じやいな、  
 其覺苦勞を思ひやつて別れた時から  
 泣つつけ、ちつさは可愛と思ふてな

ら、マ私にする様にマアこちへさ、  
 手に手を取ればあらくれし手さきに  
 悔り、ヤ誰じやチ〜おれじやはいの  
 と抱付顔、ヤア傳九郎めアレ〜  
 と言ふ聲に驚き駈け出る母親を、出  
 さじと權八綿の楯、お松を引立かけ  
 行傳九郎、戻りか〜つた榮三郎、出  
 合がしらに傳九郎 逢たかつたご道  
 ふさがれ、なむ三寶とお松を捨てひ  
 らりさゆき打ちかいく〜り拔身たく  
 つて山雀投しくじつたかご加勢の權  
 八、帯に取り付く妙三が氣轉はおり  
 たる八方の鎰にむすびめ親子して、  
 からだをじつと引あぐれば、宙にぶ  
 ら〜のふかなしや、こりや目がま  
 ふも七轉八倒、門には二人がもみあ  
 いれずあい内を氣づかふ榮三郎、す  
 き間に遁れにげ出す傳九郎、ヤア詮  
 議の有やつ遁さじと後をしたふて追  
 かくる。



戻り橋の段

切増補大江山

戻り橋の段

渡邊源吾綱  
 若黨右源太  
 郎黨左源太

雲八レッ  
 鶴澤友衛門  
 鶴澤吉衛  
 豊澤仙三郎  
 鶴澤鶴太郎  
 鶴澤網網  
 雲八レッ

渡邊源吾綱  
 郎黨右源太  
 郎黨左源太  
 若黨右源太  
 若黨左源太

人形

吉田玉幸  
 吉田光之助  
 吉田文作  
 桐竹紋十郎

この渡邊の綱が羅生門で鬼女の片腕を切落したさいふ有名な傳説は謡曲に『羅生門』歌舞伎には『茨木』戻り橋』となつて傳へられてゐますがその原據は一説によると『日本紀略』天徳二年條に閏七月九日一人の狂女が洛中に現れて死人の頭を取つて喰ひその後往々諸門に臥す病人が生き乍ら狂女の爲めに肉を食はれたさいふ事實に渡邊綱の武勇を附會して人食鬼女を作り上げたのださいふことです。その内容を申上げますと愛宕山の鬼女が夜な、洛中に現れて人を食ひ、夜は往來の人も絶える。洛

中警衛の任に當る源頼光の四天王の一人渡邊綱が君の使で堀川戻橋にかゝるご扇折小百合ご名のる世にも稀れな美女が現れ、暮れて夜道の女一人、五條まで綱と道連になつて呉れこの願ひ、綱は油断なく彼女と連れ立つて戻橋を渡る時ふさ水鏡に映る物凄鬼女の形相、何氣なく女に舞を所望して、その化の皮をはぎ大立廻りの末髭切丸の威徳で鬼女の片腕を切り落す。床本を寫しますとM 夫普天の下卒士の濱、王土に有らぬ所なきに何國に妖魔の住けるか睦月の頃より洛中へ悪鬼現はれ人を取、夜は往來の人もなし綱春雨もいっししか晴てしろ、ご月照渡る堀川のはや瀬の流落合て水首ごき戻りばし、扱も渡邊の源吾綱は右源太左

源大御供にて戻り橋へもあゆみしが  
 イカニ兩人唯伴々の姫君へ密々の仰  
 せ承り御使に参りしむ路次のさは  
 りと御秘藏の髑切の太刀賜りしは武  
 門の響身の面目片時も早く立歸り彼  
 の方よりの御返事を我君へ申上ん。  
 右源太はつと承り昨日迄も降り續  
 きしが此頃になきよき月夜、其尾に  
 ついて左源太が闇にあられば妖怪も  
 今宵は出づる事あるまじお心安く候  
 はん、ムゝあの月の模様では早三更  
 と覺ゆるぞ兩人道を急ぐべし、夜更  
 め内に主従も打連て行んとす、折  
 ふしさつと吹風す風が有ぬか岸の柳  
 の騒がしく心ならればふりかへり、  
 ハテ心得ぬ今吹風す夜嵐の身にしみ  
 じみと五体の熱氣扱は妖魔の仕わざ  
 にて我をなごさん巧みよないかなる

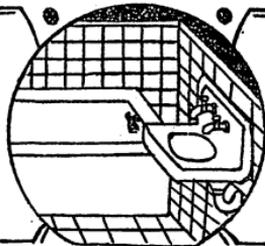
妖魔の術有共夫を恐るゝ綱にあらす  
 イテ妖怪を退治して君へ土産に参ら  
 せんイザこひ來れと太刀引をばめ木  
 の下蔭へ忍び入り若た又むら立し雨雲  
 の蔭洩る月を夜すがにてたどる大路  
 に人影も火蔭も見えず我影を、もし  
 や人かど驚きて被衣に身をば忍ぶ摺  
 けふの細布ならずして女心に胸合  
 すおもひなやみて來りけるア、今宵  
 の空の定めなく降りぬ内にと思へど  
 も爰は一條戻り橋見れば行かふ人も  
 なしア、便もなやさたゝすみて暫し  
 休らひ居たりける。綱は小蔭を立  
 出てア、イヤ女性は何れへ参られる  
 ぞ若チ、是はくお武家様わらはは、  
 一條の大宮より五條のわたりへ今宵  
 の中是非参らればならぬ者が女の身  
 で只一人此物騒な夜の道怖いゝと

歩む内今あなたののお聲にてほんに  
 悔り致しました。綱ホ、怖いぞ申は  
 尤も也五條の巨りへ参るゝ有ばア、  
 幸の能き道連れ五條の邊りへ用事  
 も有らば某送つて遣はそふ。若  
 ハお情け深い其仰お詞にしたがひま  
 すればどうぞお連れなされて下さり  
 ませ綱いざ参らふと打連立折しも空  
 の雲暗れて若月にありく小川の流  
 水に寫りし異形の姿、綱は日早く  
 今水中に寫りし蔭は若エ、綱ア、イ  
 ヤ夜更ぬ内に早くく西へ廻りし  
 若月の輪に綱遠く若放れて愛宕山綱  
 北野は近く若清瀧の綱森はこなたと  
 若ふ綱り若か綱へり若見上る顔に綱  
 はら若ばらと綱木々の雫も雲運ぶ若  
 又も雨か立休らひ綱は女をいた  
 はりて歩行馴れぬ夜道にて嘸草臥れ

し事ならん若イエ〜わらははよりはあなたこそ足弱をお連れなされまして定めしお草臥でござりましょう、綱ナニサ〜最前より見受し所ハテあてやかなおことが姿連立つ道に馴れやすく今は隔も中空の朧も春の名残りや都人とは云ひなむらいさも優しき形風俗いな事を尋ねれ共御身が父は何人なるぞ若ハイお尋ねに預りお答へ申もおはゆく父は五條の扇おり常々舞を好みし故わらはも幼き頃よりしておしへを受しが身の徳にて此程も或る御所にお宮仕へを致しました綱ホ〜さも有らん〜恥しなから某は未だ舞を見たる事なし一さし舞を見せられまいか若お送り下さる其御禮に只今御覽に入まじよふが何を申も途中の事拙き事とお叱りはモ只幾重にもと一禮し女性に扇借受て會釋をこぼし進み出空も霞て八重一重櫻狩する諸人が群つゝ爰へ清水や初瀬の山に

雪さ見し花の散ゆく嵐山惜む別れの春過ぎて夏の初めに後れにし花も青葉に衣かへ木々の翠の美しや綱テサテ面白き事なりしぞかゝる伎藝の有者を妻に持なば能樂しみ春の夜道に結ぶ縁にし解か解かぬお事か心只一ツコレサどうか〜と寄添へば若女はばつこ袖覆ひおたはむれさば知りながら嘘にも嬉しい其仰せ定めてあなたは奥様をお持ちなされて御座りましょう綱ア〜イヤイヤ未だ妻はめさらぬが見らるゝ通りの不骨もの誰も妻に成人がない若なんのまあない事かござりまじよふ。まざ〜としたそのお詞お情深きお心に今宵まみへし妾さへ縁しを結ぶ露もかな思ふ懸路の初ほたる云ひ出しかれて胸こがし若葉の闇に迷もの都女郎は取分て姿優しき花菖蒲引つ引れつ澤水に袖も濡にし事やらん綱こなたはなをも打さけて夫は御身の思ひ違ひかゝる名もなき

化粧タイル  
水道衛生工事  
洗面、浴場、  
水洗便所設計  
汚水浄化装置  
特許無臭便所



西區立寶堀北通一丁目  
新橋

岡部商會

阪急 夙川

岡部商會支店

電話番 二六六九  
電話番 二二七六  
電話番 一九七六

田舎武士思ひをかける者があらうか 若イエ  
 く知つて居ります立派なお名前 綱ム何  
 立派な名前とは 若當時門理を守りの役 頼光  
 朝臣の御門にて 渡邊源吾綱との綱ムい  
 かが致して我名をば 若サア戀しと思殿御  
 故さくより存じて居ります 綱戀しく思ふ  
 さ云ふは偽り御身が我名を存んぜしは妖魔  
 の術で有ふがや 若ムヲホー、又恟りさそ  
 ふと思ふてアノマア眞顔でコレ申御覽の通  
 私は若菜綱エヘ、シラン、敷もぬか  
 したりな汝は心付かざりし最前是へ来る  
 道すじ月の光に有りく、さ水に映りし鬼形  
 の姿若なん、綱媚よき女に化する共其本性  
 は悪鬼ならん 若ム、綱サア斯見ぬきし上か  
 らは其本性を現はすか 若サア綱君より賜は  
 る此御太刀髭切丸の利劍の切味すみやかに  
 降伏さそふか 若サア綱サア若サア綱サア若  
 サア綱サアくくく、源の頼光の家臣渡

邊の源吾綱が向ふたり變化の性体現はせよ  
 さ柄に手をかけ詰かけたなり 若こなたの妖女  
 は忽に憤怒の相を現して次第く、に變んず  
 る姿眼いからし大首上我は愛宕の山奥に幾  
 年住し悪鬼也斯見現はされし上からは我隠  
 れ家へ連れ行て引裂呉れんいざこい云ふ  
 より早く飛か、り綱が矜がみむんずと擲み  
 引立行かん其有様綱ナニこしやくなりさふ  
 り放す 若また齒みし強魔の力綱こなたは動  
 かの金剛力若引つ綱引る、若時しも有一天  
 俄かにかきくもり震動なして四方より黒雲  
 霞ひ重りて砂石さ飛す暴風に連て虚空へ引  
 上ればあやしかりける次第なり。

は用御の話電お  
 南  
 1331番・1334番  
 1332番・0701番



づまは會宴御

いのじ感・位本様皆

のまसानみ  
 理料泉温一南

理料泉温一南

橋ッ四

## 文樂座使用料 (一日)

時間 場所	收容人員	晝(自正午 至午後五時)	夜(自午後六時 至同十一時)	晝(自正午 至午後十時)	
文樂座	約 850人	平日	80 圓	100 圓	160 圓
		土曜	80 圓	110 圓	170 圓
		日曜 祭	90 圓	110 圓	180 圓

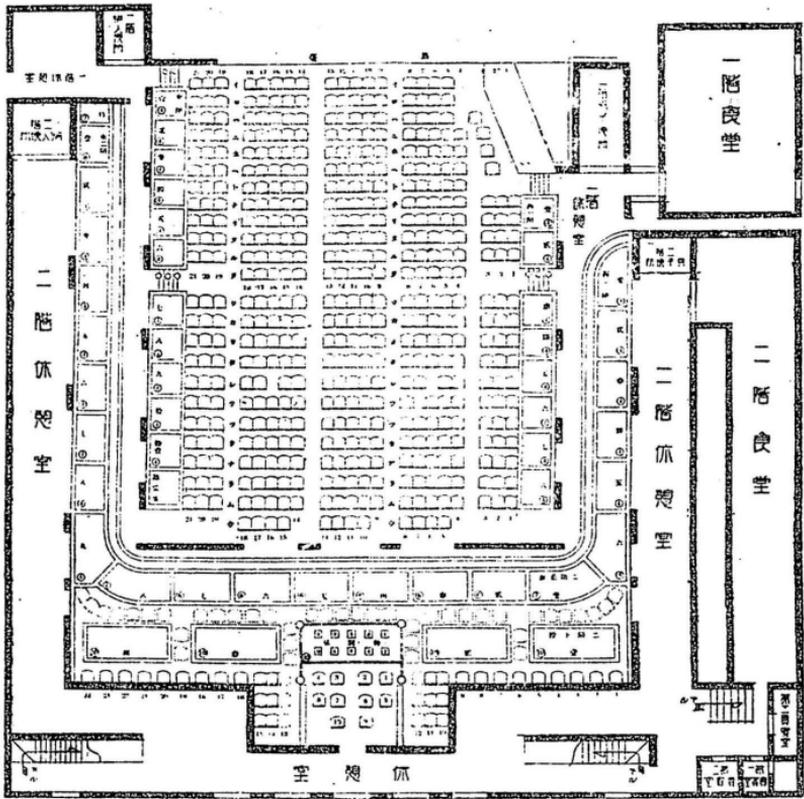
◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

## 器具御使用料

器 具 備 考	數量	料金
舞臺照明電氣料 晝夜普通燈ノミ	1回	15圓
同 普通燈ノミナラザルトキ	1回	20圓
所作舞臺 晝 夜	1回	10圓
活動寫眞設備 晝又夜映寫設備電氣技師共	1回	50圓
同 晝夜通シ	1回	70圓
アプライトピアノ 晝 夜	1回	20圓
音樂譜面臺 晝 夜	1臺	10錢
アークスポット 晝夜4・5 KW	1臺	10圓
スポット 同 大(1000W) 小(500W)	1臺	5圓
サイド・ライト 500W 1000W	1臺	5圓
シーリングスポット 100W 500W	1臺	3圓
サスペンションライト 100W 500W	1臺	2圓
フットライト 20W 100W 7球	1本	1圓
セラチンペーパー	1枚1回	1圓
大 衝 立 晝 夜	1對	5圓
演 壇 設 備 同	1回	2圓
其 他 必要ニ應ジ實費		
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人	1圓宛
冷風裝置使用料		16圓
暖風ラザエータ使用料		無料
		無料

# 文樂座御席場案内



御、観覧、料の外一切御不要の上  
 大部分椅子席になって居りま  
 すからお一人でも御愉快に洋  
 服でもお樂に御見物が出来、  
 またお出入が御自由です。

前、賣切、符、壹等お座席。壹等椅  
 子席のお切符は五日前から發  
 賣致します。また五日以後の  
 お切符も壹等席に限り御豫約  
 申し上げますから上圖の座席  
 表に依つてお早く御望みの御  
 席席をお申し込みになればお  
 心のまゝにお好きな處が御自  
 由にされます御用命の節お呼  
 出しの電話は

南四七一一番で御座あます

●切符賣場右指定席切符は當日  
 前賣さも正面西側本家入口に  
 て發賣して居ります。

●二等席・三等席切符は當日正  
 面入口にて發賣致します。

●尚多人數様お團體様のお申込  
 も御相談いたします。

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合いますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處で御願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携帯品は

正面一階に御預り所が御座います。お持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備があります。お帰りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのこきは御携帯願ひます。

お場席

各自に御持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうに御願ひいたします。

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所でお自由に御飲み下さい。

場内にて

寫真撮影は絶對にお断りいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい。『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座りますから御使用下さい。△シタタルはレイトローション使用。

休憩の間は

四ツ橋

文樂座

前賣切符専用電話南四七一一番

電話南(75)三〇三二番  
三七八八番

大阪 歌舞伎座

日本名物南地名妓

第五十回

あしべ踊

近松花曆  
さくら音頭

毎日五時廿分より三回

日曜祭日三時半より四回開演

設備断然東洋第一!

アイス・スケート場

ウィンタースポーツの王座!

歳末から新春への絶好の行楽!

毎日 午前10時 至午後11時

日曜、祭日に限り午前9時より

一般外來入口 北側電車通り

御観劇の方は幕間の時間を利用してお出入りして戴けます。

大阪 歌舞伎座 アイス・スケート場

座日朝	座天辨	座竹松	座花浪	座中
切封日近	切封日近	切封日近	日初日一	日初日一
霧河消月	限りさ日夢	妾はエ世第六	知無見エ豆	獨阿相
のの上の防	りく女み	は天ス界六週	開えプの	道波馬
太の太	なき音の	使使キモ	行マるロ	中五十三
笛陽手者	舗頭歌頃	ちやない	取ム目ン粉	驛渡
猿若青松	明武月冬	ヒ八僕南	座角	椀續
飛薩廠飛	曆者形木	ツ時カウ	第一 新組織新派劇	久ものぐるひ
脚髻年鴉	名繪崩平	トラのウホ	第二 七の替り	
	劍士	ア晩イ	血煙天明陣	
		青年	おぼる夜の頃	

昭和九年三月三十一日印刷  
昭和九年四月一日發行

編輯人 成山桂三發行 文樂座

印刷者 永井大三郎 印刷所 永井日英堂印刷所  
大坂市西區土佐堀通一丁目  
大坂市西區土佐堀通一丁目

宴のこの術藝土郷に春の蕩駘

# 文樂座の御宴會

二十人様以上なればお手輕で  
いつち御徳用で娛しめる

お一人様分 金 五圓也

御觀覽は……………一等椅子席  
御食事は……………御一緒に  
附……………床本役割付  
記念寫真……………人形を入れた特別撮影

(お寫真はお歸りまでに  
人様一枚宛差しあげます)

お申込は五日前にお願します

電話南(75) 4711番へ

甚太平記白石齋  
 弘法大師  
 義經千本櫻  
 紙子仕立両面鎧  
 曾補大江山



トクトレム



店商平賛尾平京東